第2部　各分野での震災後の取り組み
第4章　子どもを守る取り組み

猿渡士貴

はじめに

本章では、あの日、子どもたちの命を守るために奔走した大人たちのことを記す。

「てんでんこ」という言葉の示す通り、自分の命を守ることさえ難しい大災害の渦中で、どうやって幼い子どもたちの命を守ることができたのか。その個々のプロセスを、多くの子どもの成育にかかわる人々に伝えたいと思い、取材を始めた。

子どもの命を預かる施設の先生たちが、どのような思いで子どもたちを守り抜いたか。そこにはどのような覚悟があり、判断と行動があったのか。また、小さな子どもを抱えた母親たちのどのような行動が、生死を分けたのか。さらに、防災教育の在り方などにもふれながら、被災後の子どもたちの生活や心をどのようにして守っているか、を報告する。

幸い、公私を問わず市内の保育所、幼稚園、児童館、小学校、そして学童の家保育の先生たちや、小さな子どもを持つお母さんたちの協力を得ることができた。辛い体験を、言葉を絞り出すようにして、話してくれた人も少なくない。その言葉には、力がある。それゆえ、なるべく語りを活かして記述しようと思う（＊以降、ゴシック体は話者の語り）[注(1)]。

A　その時、どうやって子どもを守ったか（保育所・幼稚園編）

本節では、3月11日当日の地震発生前後の様子を、被害の大きかった地域や施設を中心に報告する。

想像を絶する危険の渦中で、個々人の瞬間瞬間の判断が生死を分けた。その時、どのような問題に直面し、いかなる選択をして、いかに行動をしたのだろうか。

まずは、震災後の防災対策に大きな影響を与えた千鶏保育所の事例から話をはじめよう。

1　千鶏保育所では

千鶏保育所は、海から少し上がった場所にある小さな僻地保育所だった。「だった」と過去形なのは、保育所は津波で基礎ごと流され、閉鎖されてしまったからである。

話は、震災の2日前から始まっていた。

3月9日のこと

伊藤るみ子先生（昭和32年生　取材日：２０１４年3月20日）によると、3月9日は、お別れ会をしており、津軽石保育所から所長（坂本静枝先生）も来ていた。千鶏保育所は僻地保育所だったため、津軽石保育所長が所長を兼任していたのだ。

ちょうど、お昼のお弁当を広げようとしている頃、かなり大きめの地震が起きた。子どもたちは直ちに机の下に潜った。日ごろの練習の賜物である。

その日は、被害はなかったものの、園から海の方を見ると潮が引くのが見えたので、念のため保護者に迎えに来てもらった。先生たちは、近くもっと大きな地震が来るのではないかと危惧していた。海沿いの道を通勤する途中に、もし、大きな地震があったら車を捨てて山に逃げようと職員間で話していた、という。

写真１　在りし日の千鶏保育所　園庭にて
撮影：宮古市

3月11日　地震発生時

3月11日、保育所では保育士の伊藤るみ子先生と臨時職員の2名で、13人の子どもたちをみていた。

そして、14時46分。今までに経験したことのないほどの大きな揺れが来た。お昼寝の時間だったので、子どもたちはまだパジャマ姿であった。2日前の地震が予行演習のようになり、携帯の地震警報が鳴るとすぐにお母さんたちが迎えに来て、我が子を急ぎ連れ帰った。最初に迎えに来たお母さんが、「津波が来る。大きな地震だから」と言って、子どもたちの着替えを手伝ってくれた。伊藤先生は、そのお母さんの言葉と行動に、他の子どもたちを守ってもらったと思っている。

地域に根差した小さな保育所なので、何かあれば地域の方々が来てくれるんじゃないかと思っていました。「助けて」といえば、誰かきっと来てくれるんじゃないかという、ちょっと甘えがあったかと思う。その時に危機を感じたお母さんたちが来てくれて、子どもたちのほとんどを帰しました。

その後、すぐに情報が途絶えた。

地震発生後15分以内には、保育所にいた園児13名中12名を保護者に引き渡すことができた。すぐさま1人残された園児を連れて避難を開始した。

避難の様子

川の反対側にある千鶏小学校が地域の指定避難所だったので[注(2)]、どちらに逃げるべきか一瞬迷いましたが、マニュアル通り、保育所と地続きにある消防の屯所（＊コミュニティセンター）に行くことにしました。小学校と屯所の標高は同じくらい。マニュアルでは、民家の脇を通って丘を上がり、上の道路を通って屯所に避難することになっていました。屯所は2階建てで屋根やトイレもある。そこに避難することは保護者にも伝えていたし、屯所への引き取り訓練もしていました。

そこへは車に乗って逃げることにしました。一旦、下に降りて車のところに行くと、もう波が来ていたので急いで駆け上がりました。外海のため、市内よりも波が早く来ました。避難に車を使ってはいけないというけれど、車を使った。もし、歩いていたら、間に合わなかったでしょう。

間一髪、屯所に着くと、根滝山にぶつかった波が跳ね返って山のように覆いかぶさってきて、高台にある屯所が水をかぶりました。波は1度目はじわじわと来て、2回目は大きかった。迫りくる波から逃れて、屯所の裏手の1メートルほど高くなったところに、水をかぶりながら、必死にお尻を支えて子どもを押し上げました。子どもは泣きもしませんでした。

同じく屯所に避難しながら、そこからさらに逃げずに様子を見ていたおじいさんが、目の前で波にさらわれました。

バスの中で夜を明かす

その後は、岩手県北バスに乗せてもらって暖を取りました。このバスは石浜方面に向かったけれど、津波で先に進めずに引き返し、高台の屯所の近くに停車していました。そこには、下校したものの石浜地区に入れず引き返してきた小学生10名ほどと、石浜神社前のデイサービスに来ていた足の不自由なおばあさんと職員2名が乗っていました。運転手が無線で営業所に掛け合って、エンジンをかけて暖を取らせてくれていたのです。

写真2　津波後の千鶏

撮影：宮古市

しばらくして、目の前で波にさらわれたおじいさんがバスに運ばれて来ました。やがて、「胸が痛い」と言いながら息を引き取りました。助けてと言われても、どうしようもなかったのです。

持ちだした荷物にあった飴を皆で分け合って食べました。夜になってから小学生たちと1人残った園児の迎えが来て、ようやく無

事に引き渡すことができました。園児を迎えに来たおじいさんは石浜から歩いて来ました。家は流されたと聞きました。

消防の分団長が後から来てくれました。津波で消防団の車も流されたと聞きました。山側の助手席に座っていた人は山に逃げて助かったけれど、海側の運転手は流されたそうです。重茂での死亡者は1人でしたが、千鶏では建設会社の人や地元の人が多く亡くなりました。わかめの時期だったので、作業で皆、下の方にいたためです。屯所には怪我人や遺体が運ばれてきました。遺体は27、8名だったと記憶しています。

翌朝、消防団の人の手配で小学校の先生と一緒に帰途に就こうとしましたが、道路が瓦礫で寸断され、里集落の橋も落ちたため、災害対策本部があった重茂漁協支所にとどまり、待機しつつ孤立した千鶏の状況を伝えました。千鶏には食べ物はほとんどなかったのですが、重茂の方には食べ物があり、避難所によってこんなにも状況が違うのかと思い知りました。

そして、14日になってようやく家族のもとに戻ることができました。家族は皆無事だったのですが、高浜地区にあった自宅も実家も津波に流されていました。家族に再会して休憩すると、すぐに役所に報告に行きました。支所に来た市の職員に、自分の名前と保育所が流されたことを伝えましたが、役所には伝わっていなかったようで、一時、行方不明者リストに自分の名前がありました。

しばらく休んでよいと言われたのですが、千鶏のことが心配で居ても立っても居られませんでした。道路が復旧して、何とか再び千鶏に園児の安否確認のために入れたのは、17日になってからでした。

安否確認に歩く

安否確認に回る中、伊藤先生は保護者に引き渡した園児のうち1組の親子が、流されて死亡したことを知る。あの最初に迎えに来て、子どもたちの着替えを手伝ってくれた母子だった。

宮古の人はチリ地震など大きな津波を経験しているので、大きな地震があれば30分以内に津波が来ることを小さい時から教えられて知っています。亡くなったお母さんは日ごろからリーダーシップのある方で、保育所で他の子の着替えを手伝い、小学校に上の子を引き取りに行き、学校から降りてきたところで津波にさらわれたようでした。かなり上の方で車が発見されましたが、車の中に保育園バッグが残っていたと聞きました。

もう1人、石浜地区には4月から保育所に入る予定の子がいて、前日に入所説明をしたばかりでした。私のことを「おばちゃん」と呼ぶので、「保育所に入ったら先生と呼ぶんだよ」と話しました。その子は、ひいおばあさんと家にいて、逃げられないひいおばあさんと一緒に流されたそうです。

また、園児の中に九死に一生を得た子もいました。その子の家は小学校のすぐ側にあったのですが、家に着いた直後に水が入り、お父さんお母さん、妹とともに流されました。しかし、保育園バッグをまだかけたままだったので、バックの紐が何かにひっかかり、その子だけが生き残りました。たまたま外出していたおばあさんと2人きりになってしまいました。

どこの施設でも、非常時には子どもを保護者に引き渡すマニュアルになっており、そのための引き取り訓練なども実施していた。それでも、伊藤先生は、地震「直後」に保護者に園児を引き渡して帰してしまったことを、今もひどく後悔している。「そのまま一緒に避難すればよかったのですが、あのように大きな地震の時にそれは言えなかった」という。

保育再開を望む声

その後、千鶏では山の奥の共同作業所が家を失った方々の避難所になりました。卒園式をしたかったけれどもできないので、安否確認に回る際に卒園証書を渡すだけになりました。

家を回っているとき、「保育所はいつからやんのえ?」と保育所再開

を望む声が多く寄せられました。私が見ていれば、お母さんお父さんたちの手伝いができると思いました。保育道具はすべて失ってしまいましたが、先輩保育士の松崎裕子先生（＊取材当時　磯鶏保育所長）に「30年の保育経験が身についているから体一つで大丈夫。保育できる」と勇気づけられました。

そこで、紙芝居や折り紙などをかき集め、娘と手書きの保育再開のお知らせを配って歩きました。4月13日から通算8回、「千鶏あおぞら保育」を行ないました。はじめは、まさに「あおぞら保育」だったのですが、間もなく園児の家の作業場を借りての保育となりました。

その後、園舎を消失した千鶏保育所の閉鎖が正式に決まり、以降の千鶏地区における保育事業は5月より重茂児童館が引きうけることになった。地元の保育所を望む声は多かったが、それは叶わなかった。伊藤先生ご自身は、津軽石保育園に籍を置きながら重茂児童館に通い、移籍した園児たちの様子を見守って、6月1日付けで移動となった。

2　津軽石保育所では

(1)　津軽石保育所の状況

津軽石保育所も園舎が全壊するほどの甚大な被害を受けた。前述のとおり、千鶏保育所は津軽石保育所所長が兼任していた。震災当時の両保育所の所長・**坂本静枝先生**（昭和26年生）と現所長（＊取材当時）**盛合淳子先生**（昭和30年生）に話を聴いた（取材日：2014年3月19日）。

午睡時のパジャマ着替えをやめる

先に示した通り、9日に大きめの地震があり、その日、坂本先生は千鶏保育所で行われたお別れ会に出席していた。通常は午睡の時にパジャマに着替えさせていたが、坂本先生は、翌日の10日から念のため、上着と靴下だけを脱がして寝かせるようにしたという。このことが3月11日の避難の際に功を奏することとなる。

地震発生直後の様子

3月11日、午睡からそろそろ目を覚ます頃に大きな地震が発生した。保育所が市に提出した震災時対応の報告書には、発生当時のより具体的な記述がある[注(3)]。

「発生と同時に布団をかぶる等の身を守るよう指示し、安心感を与えるよう配慮しながら、身支度を整えるよう援助した。未満児組は[注(4)]、目をさましていない子もいたので、介助しながら園庭に集合後、背負ったり手をつないで高台に避難する」。（＊注は筆者による）

その際、非常持ち出しと緊急連絡簿を持って出た。その日は、欠席の2名を除いた園児53名が登所しており、7名の職員が勤務していた。坂本先生は、避難の様子を次のように振り返る。

子どもたちが服を着て寝ていたのが、避難時間の短縮になりました。園庭に待機している時点ですでに携帯は繋がらなくなっていました。防災無線が「大津波警報」と言ったのが聞こえました。避難しようとしていた矢先に「おしっこをしたい」と言い出す子がいて、トイレに連れて行ったところ、中が水浸しになっていました。水道管が破裂して、すでに水が上がってきていたのです。

園庭に戻ると、近くの人がフェンス越しに、「俺は前の津波を経験したが、あれよりすごかった。先生、すぐ逃げろ」と言ってくれました。このことがよかった。何人かお迎えに来ており、他の子たちをその間、園庭で待たせていたのです。それで、「すぐに行きましょう」となりました。

避難開始

園の避難マニュアルでは、公園（2014年当時の仮園舎があった場所）に一旦避難して、状況をみて小学校と一緒に行動することになっていた。そのように訓練してもいた。だが実際は、公園に一時避難するような余裕はない。近所の人が「学校はもう上に避難しているから上に行け！」と声をかけてくれたので、園庭からそのまま学校の裏の

高台（マエモリヤマ）に避難した。それでも、地震発生直後に避難したので、20分後には高台に行っていた。

マニュアルには、学校より上に避難するという想定はなかったので、それはとっさの判断でした。もともとお散歩の時に声をかけてくれたりしていましたが、あらためて近所の人の声掛けはとても大事だと思いました。津軽石の出身ではないので、地域の人たちの助言がなかったら判断できなかったでしょう。避難している間も子どもたちは誰も泣いたり、「おうちに帰りたい」と言ったりすることはありませんでした。

一時避難そして移動

高台に着いたら、近所の人がビニールシートを出して子どもたちを座らせてくれました。そうこうする間にも地域の皆さんが次々に避難してきました。上から見ると波が押し寄せて来るのが見えました。

その頃、ちょうど山の方で工事をしていて、そのための作業小屋が設置されていました。狭いけれど簡易トイレもあり、「そっちだったら寒さを凌げるから」と教えてくれる方がいて、作業小屋まで移動することにしました。学校の方々は作業小屋よりもっと上に避難していました。

小学校へ移動し夜を明かす

4時半過ぎに学校の皆さんが教室に戻ることになり、「保育所さんもどうぞ」と言ってくれたので、一緒に降りてきました。校庭の半分まで水が来ていました。そこで人数確認をもう一度して、開放してもらった畳やおもちゃのある2階の支援教室で、随時保護者の迎えを待ちました。教室に一緒に避難したのは、職員7名、迎えの保護者14名、園児47名でした。

余震がずっと続いたので不安でした。小学校にいる間、ここからさらに避難しなくてはならない時はどこに行くかと考えました。停電の中、ろうそくを立てて、子どもたちに寄り添い、おやつをあげるなどして、できるだけ子どもを不安にさせないようにしました。

学校の先生方には本当によくしていただきました。近所の人がバッテリーを出してくれて、保育所だけにストーブも焚いてくれました。非常用毛布も出してもらったのですが、それはあまり温かくなかった。運良く、たまたま職員の1人が近所に住んでいたので、毛布を持ってきてくれました。学校からも乾パンと水を少しいただきました。

7時過ぎには、炊き出しのおにぎりをいただきました。温かいおにぎりで、みんな喜びました。一番小さな子は疲れたのか、ごはんが出てくる前に寝てしまい朝までぐっすりと眠りました。

保護者のお迎えは本当に随時でした。10時くらいに山を歩いて来た方もいました。とにかく、子どもたちが不安にならないように、一緒にいるようにしました。1人の女の子が夜になって熱を出しました。その子のお母さんは仕事で不在だったため、おじいさんおばあさんが迎えに来たのですが、不安だったのでしょう。祖父母の車にあったもので額を冷やしたりしていましたが、夜中にお母さんが帰って来て一緒に寝てくれたら朝には元気になりました。

次の日の夕方、最後の子どものお迎えが来たので、職員も家に帰りました。

避難所生活

避難当初は、畳やおもちゃのある2階の支援教室を避難所として使わせてもらったのですが、翌日には下が見える方がいいだろうと、1階の教室を借りることができました。昇降口近くのお湯の出る洗面所もトイレも近いところで、その一角すべてを保育所だけで使わせてもらえました。特別待遇でした。被災毛布も水もすぐに届きました。また、下に敷く銀のマットが敷き詰める分欲しいとお願いして、23日までには役所が届けてくれました。

被害に遭ったお母さん

震災後1、2週間は、園児の安否確認に費やしました。津軽石保育所

では、お母さんとおばあさんが亡くなった兄弟がいました。お父さんに、「私たちがずっと子どもたちを預かっているので、お母さんを探してきてください」と引き受けました。次の日の5時、6時までその子たちと一緒にいました。

お父さんが迎えに来て、子どもたちが「ママは？」と聞いた時の光景が忘れられません。お母さんは、迎えに来る途中で何かを忘れて家に戻って亡くなったそうです。おばあさんも、足が悪いのでお家で流されたと聞きました。

学校を間借りして通常の保育を再開したのは、3月の最後の週になってからでした。

保育所の被害状況

保育所はもう、茫然とするような有様でした。高さ2㍍前後の波が押し寄せたため、建物は残っていましたが中身はひどかった。文集を積み上げ、飾りつけを済ませて卒園式を迎えるばかりだったのに、それらに泥が付いてぐちゃぐちゃになっているのを見ました。その時の気持ちは、ショックよりも不安の方が強かった。そして、保育道具の泥洗いや消毒には夏までかかりました。

震災以降にあらためたこと

あの日、小学校に避難している間、学校からさらなる避難が必要になったらどうするか、不安にかられた坂本先生は、後日、主任ともう一度近辺を見て回ったという。高い場所はあるにはある。だが今回は、たまたま明るいうちだったので高台への避難が可能だったが、日が暮れてからでは行くことはできなかったと推測している。

このほか、津軽石保育所では、震災時の反省を受けていくつか方針を変えた。例えば、

① 保護者への避難経路の周知を徹底すること。

震災前、津軽石保育所では避難訓練は月に1度していた。この日にこういう設定で避難すると事前に告知する型の訓練である。津波の時は、一時的に（2014年現在仮園舎がある）公園に行って、さらなる避難が必要な時は小学校に行くという訓練をしていた。だが、現実はそうした訓練では意味がなかったという。

実際は、高台からさらに作業小屋に逃げたので、そのことを保護者に伝達することが難しかった。パターンを示したより具体的な避難マニュアルの周知を徹底しておけばよかったと反省しています。

② 無理をして迎えに来ず、保育所を信用してほしい。

また、「すぐに迎えに来られないときも、必ず子どもは保育所の方で預かっている、という安心感を持ってもらうことが重要でした。それを、もっときちんと話しておけばよかったと思います。子どもを迎えに来て、亡くなった保護者の方がいたことをずっと心に抱えています。

「その点は今後に活かさなければならない」と、坂本先生は語る。

③ 避難の迅速化

さらに、午睡時に着替えで脱いだ服やズックを、震災以降は、さっと持って逃げられるように、保護者に大きめの布の袋を用意してもらい、それに入れるようにしたという。

⑵ 孫を迎えに

次には、津軽石保育園に孫を通わせていた人の体験を記す。話をしてくれたのは、津軽石の**中島要一さん**（昭和7年生）と**ムツ子さん**（昭和23年生）である（取材日：2015年6月27日）。震災当時、中島家には保育所に通う2歳になる孫がいた。

11日の様子

3月11日、要一さんは日課の散歩をいつもより早めに済ませた。

（＊要一さんが）散歩の途中で堤防を見て、自宅に戻って何分もしないうちに、大きな揺れが来ました。（＊ムツ子さんは）、テレビで津波警報が出たことを知り、ガスを止めて「お父さん（＊要一さん）どこ？」と叫びました。寒かったのですぐにコートを着て、リュックを背負って長靴を履いたら、（＊要一さんが）「何も持たずに逃げろ」と言ったので、仏様もお位牌も持って出ることができませんでした。「仲良くし

てて ね」と仏壇に手を合わせて表に出て、近所の人に声をかけました。でも、近所の人の中には逃げない人もありました。

孫を連れて逃げようと思い、まずは保育所に向かいました。孫はまだ昼寝から目覚めていなかったので、園バックを受け取り、起こして学校に連れて逃げました。それでも、まだ危ないので、さらに裏山に登ってお墓の右側まで避難したのです。

その時は、もう小学校の子どもたちがそこに来ていました。保育所の子たちは後から遅れてきました。保育所の他の親御さんはまだ来ていなかったです。学校の裏山の一番上に保育所の子たちを避難させ、その下に小学校の低学年、その下に高学年、その下に地域の大人たちが避難しました。なるべく高いところに小さな子どもたちを逃がしたのです。

波が来るのは見なかったです。地震が起きたのが、まだ昼間でよかった。

孫のおむつを取りに帰ってやりたかったのですが、近所の人が近くの家の人からもらってくれました。保育所の子どもたちは寒くてかわいそうだったので、近所のおばあさんが、後からリヤカーで布団や毛布を積んで持ってきました。

避難の夜

避難した高台から降りて来てからは、小学校でおにぎりを食べた後、孫を連れて親戚の家に泊めてもらった。震災の日の夜は、孫の母親は仕事で帰ってこられなかったが、両親が共働きなので孫は、いつも家にいるムツ子さんがいれば平気なのだそうである。

その翌日、父親が孫を迎えに来て、以降、西ヶ丘にある母親の実家のお世話になり、要一さんたち3人は、親戚や避難所で生活することになった。

3　愛宕保育所では

保育所には被害はなかったものの、愛宕地区は甚大な被害を受けた。震災当時、愛宕保育所に務めていた**舩越昌子先生**（昭和30年生）に話を聞いた（取材日：2015年9月17日）。

震災時は愛宕保育所にいました。今、振り返って問題だったと思うのは、園児を引き取った後の保護者の行先を確認することでした。愛宕保育所でも、あの日、おじいさんが迎えに来て、海辺の祖父宅で待機していた園児が1人亡くなってしまいました。安全な地域に帰す事が大事だというのが反省点でした。

保育所の隣が小学校だったので、情報を入手するため、まずは学校の校庭に避難しました。そこには地域の方や消防団の方もいました。

そこで、「危ないからもっと高台に行きなさい」という指示があったので、地域の方々と一緒にすぐ裏の高台に避難しました。子どもたちが「寒い寒い」というので、落ち着いた時に毛布を持って来たりもしました。

その後は、小学校の体育館に避難しました。保育所から莫座、布団、おやつなどを持って来て、少量ずつ分け合って子どもたちに食べさせました。雪が降ってひどく寒い夜でした。体育館に石油ストーブは3台くらいあり、灯りがあることは、子どもたちにとって何より安心できたことだと思います。

保育所に被害はなかったのですが、数軒先は家屋が倒壊、道路の中央に家が流されているなど、周辺はかなりひどい状態でした。保護者の中にも、家を失った方がありました。

迎えに来られた保護者の中には、波に追いかけられて怖い思いをした方もありました。暗い中、お子さんを連れて帰ると言うお母さんがいたのですが、被災している地域だったので、引き止めて、朝方帰宅されました。また、遠い地域からおばあさんが迎えに来られました。朝になってからの方がいいと引き止めたのですが、「連れて帰らなければダメだ」と言って帰られました。

結局、残った子どもは10人くらいでした。学校が避難所になっていたこともあり、市の職員・消防団員の方々にご協力いただきながら、一晩過ごしました。

次の日は、校長先生が教室を開放してくれました。少人数に分かれて各教室にシートを敷き、保育所から持ってきた布団を、地域の方にも提供しました。そうした状態で、夜間も余震があるたびにストーブの火を消しながら、朝を迎えたのです。結局、3日目の午前中まで、子どもを預かりました。

4日目からは、子どもたちの住んでいる地域の避難所を見回り、状況確認をしました。また、保育所で炊き出しもしました。幸いガスは使えたのです。水は、被災しない地域に住む所長が持って来てくれました。職員は小学校に出向いて、食事配布の手伝いもしました。

その後、被災した2世帯が体育館で避難生活をすることになったので、保護者が活動しやすいように、保育を再開しました。園児の食事は、おにぎりを提供しました。

4　小山田保育所では

(1)　地震発生当時の様子

小山田保育所が市に提出した当時の記録には、つぎのようにある[注(5)]。

「0歳児11名、1歳児23名、2歳児14名、3歳児28名、4歳児18名、5歳児13名、計107名

11日昼寝中、所長の指示で一旦保育室中央へ避難。揺れが収まった時点で着衣開始。大津波警報で公民館へ避難誘導。

職員の対応：寒さが厳しく毛布や職員の車を利用し園児の暖をとる。携帯ラジオで情報収集。保育所門扉に公民館に避難していることを掲示。迎えが来た時点で保護者へ引き渡す【名簿チェック】炊き出しの手伝いと児童引き渡しと保育　臨時職員帰宅（午後7時30分）正職員公民館へ泊り残った児童の保育と安全確保。指定の職員2名駆けつける。

12日開所するが利用なし　4名利用（避難所にいて帰れなかった？）給食⬇避難所のおにぎり&即席みそ汁　保護者引き渡し、児童の安全確保、保育所点検、正職員9名午後4時帰宅

栄養士、臨時保育士2名、通勤道路の安全確認取れず避難所泊　状況把握のため、正職員1名宿泊

避難所で親子2組（児童4名）職員3名宿泊　公民館灯油不足にて保育所から持ち出し

13日2組親子へ保育所開放歯磨き、シャワー、昼寝など　避難所より昼食を運ぶ、給食⬇避難所のおにぎり&即席みそ汁　午後4時過ぎ小山田公民館から磯鶏小学校避難所へ移動

14日　通常保育開始　利用15名　給食献立変更して提供　食材購入状況把握のため徒歩にて業者回り実施」

当時、小山田保育所の職員であった**上山純子先生**（昭和35年生）は、次のように話している（取材日：2015年9月17日）。

私がいた2階の部屋の揺れはひどくて、ホールを部屋として使っていたのですが、ホールの真ん中までテーブルが動いて、机の引き出しがすっかりあいてしまっていました。もし、引き出しに重いものが入っていたら、テーブルもひっくり返っていただろうと思いました。

揺れの中を上から子どもたちと一緒に降りてきたのですが、子どもたちが異様に静かで、指示が1回で通ることを異常に感じました。

その後、防災無線で津波が何メートルと言うのが聞こえてきました。すぐにいち早く迎えに来た保護者の方があったのですが、その時にはどこに帰るかを聞くことはなく帰してしまいました。後から聞くと、津波に追いかけられた経験をされた方もいました。

近くの公民館にみんなで避難しましたが、海側に住む保護者が多くおり、その日は公民館に泊まりました。

夜中になって、ずぶ濡れでお父さんお母さんが迎えに来られたり、自宅の屋上に避難していて水が引くまで迎えに来られなかった方がいらしたりしました。次の日のお昼になってようやく最後の方が迎えに来られました。

幸いショッピングセンターや薬王堂（ドラッグストア）が保育所のすぐ近くにあったので、すぐに食べ物を持って来てくださり、カセットコンロやカップラーメンなどもいただきました。

狭い公民館の中にすごい数の人が避難しているので、トイレが大変でした。

次の日に保育所に戻ってみると、園庭に隆起して段差ができていたり、側溝の蓋がはね上がってはまらなくなったりしていました。

涌田朋子先生（昭和32年生　取材日：２０１５年９月17日）は、十勝沖の地震の時に津波を見ているので、津波がどういう風に来るかという記憶がある。そのため、閉伊川伝いに津波が上がって来るだろうことを知っていたので、保育所がある場所も危険だと、とっさに思ったという。洪水が起これば、浸水する危険がある地域でもあったからだ。

付近で高台といえるのは公民館で、そこに１０７名の子どもたちが避難しました。50名近くもの未満児もいたので、小さい子どもたちの安全を確保するために、本当は戻ることはよくないと知りつつ、急いで園に戻り毛布をかき集めて来ました。また、雪がちらついていたので、職員の車を高台に上げ暖をとれるようにしました。すぐには公民館のカギは開かなかったのです。

近くの病院の先生も協力してくれました。また、少しでも口に入れるものを手に入れることができたのは、地域の方々のおかげでした。

小山田橋を渡って迎えに来る保護者もいたので、どちらに戻るか確認をして、「そこが大丈夫だという警報解除の知らせが来るまでは一緒にいましょう」と足止めをしました。結果的にはそれがよかったと思います。

下の子の検診の日で保健センターにいた保護者は、津波に追いかけられるように逃げたそうです。上の子は園にいたので保育所のみんなと一緒に逃げました。

携帯のワンセグを持っている人に少しは見せてもらったのですが、ラジオもなく情報が入って来ないということがすごく不安でした。また、見たら見たで怖いのでしょうが、目の前には体育館やドラの建物があり、自分達の目で川の状態が見えないことも不安でした。

とりわけ、明かりもなく見えないというのはすごく不安でした。明かりの強いライトを地域の人が持って来てくれて、それで公民館をぱわーっと照らしました。でも、十分な数の懐中電灯を園で準備しておかなかったことを反省しました。暗いということは、子どもたちに不安を与えるからです。

子どもたちに暖を取らせるのに必死だったのですが、車を上げたことも、良かったのかどうかわかりません。

後日、もっと高い避難先を探して、小山田神社という市内を見下ろせるところへ避難訓練をしました。その際、どのくらいの速さで行けるかを計りました。参道のような急なところに誘導車[注(6)]を上げるのは非常に困難でした。また、急な階段をおんぶして上がるのは、危険だということもわかりました。

震災後に、防災グッズとして、保育士1人で3人の子どもを負ぶえる負ぶい紐が売り出されましたが、「どうしてこういうものを作ったのかな」と感じました。保育士さん方からの要望に応えてということですが、1人で前と後ろに子どもを負ぶってどうやって逃げるのだろう？子どもを助けたいという思いで、必死になればできるかもしれないけれど、園の立地条件もあるだろうし、なにか違う方法はないのかと思いました。

インタビューの際、震災時をふりかえり、涌田先生は保育士という仕事について次のような心情をもらしている。

すごく重いなと感じます。保育士一人ひとりにのしかかる責任、命をあずかることの重さというのが。そこまで私たちは期待されているのかと考えた時に、保育とは、大変な仕事だなあと思いました。

(2)　その時、母親は　　小山田保育所に迎えに行く

ここで、小山田保育所へ市街地から子どもを迎えに行った母親たちの行動について記しておく。

日立浜の**村木めぐみさん**（昭和48年生　取材日：２０１５年３月７日）は、あの日は、藤原にある自社の水産加工工場で働いていた。

地震発生

地盤は砂地なので大きく横揺れしました。2月から余震が続いていました。揺れが来ると刃物を使う作業をやめて待機、おさまったらまた作業を続行していたのですが、3度目の揺れの時は気持ちが悪くなるほどだったため、工場の外に出たら、車も揺れていました。

父が2階の事務所から外を見て、「川の底が見えるから貴重品をもって避難所に逃げろ」と指示しました。従業員たちはもう走っていました。すぐに車で保育所に迎えに行きましたが、信号が落ちてひどい渋滞となり45号線が渡れませんでした。

急ぎ小山田保育所へ

下の子の迎えに早く行かないと交通規制がかかると思い、急ぎました。小山田保育所では先生が避難所の公民館に誘導してくれました。

坂の上の公民館の駐車場に、子どもたちが固まって待機していました。山方面の人は帰れたのですが、海方面の人はそこで待機することになりました。保護者の1人が交通規制にひっかかり戻ってきました。

近所の人もだんだん集まってきました。車のエンジンをかけて中に園児を入れて暖をとりながら公民館が開くのを待ちました。

子どもたちは、保育所から持ち出したおやつのバナナを食べたりして落ち着いていましたが、暗くなってくると「お母さん」と泣き出す子もありました。

避難先の公民館で

ようやく公民館が開放され、2階には若い人や子どもが入り、1階のトイレの近くにはお年寄りが入りました。お湯を沸かしてカップラーメンやおにぎりなど温かい食べものを提供してもらいました。

夜になると、避難してくる人が増えました。ドラや薬王堂が提供してくれたペットボトルの水が下の階にたくさん持ち込まれていました。石油ストーブもありました。困ったのはトイレでした。水洗が使えないのが一番困りました。また、暗いのを子どもたちが嫌がるので、集団でトイレに行きました。

頻発する余震のたびに石油ストーブの火を消しました。大変なので3人が順番で消しました。毛布が足りず、ストーブだけでは寒かったです。

だんだん親たちが迎えに来ました。もう、車では来られません。あるお母さんは、夜中に藤原から小山田まで歩いて迎えに来ました。「子どもいませんか?」、「孫いませんか?」、「お母さんいませんか?」と、公民館に尋ねてくる人が多くなって来ました。

鍬ヶ崎が全滅だという情報を耳にしました。日立浜もダメだろうと思いましたが、いやな予感はしなかったので、息子は心配ない。学校の先生が守っていてくれると信じていました。

明るくなってから行動しようと思っていました。小山田トンネルは交通規制がかかり車では通れませんでした。お昼まで様子をみて、車を流された同級生の妹親子と、もう1人の友達と一緒に車で鍬ヶ崎に向かうことにしました。朝食は出入り口にパンやおにぎりや水があり、食べ物には困りませんでした。

5　赤前保育園では

赤前地区にある赤前保育園では、あの日、2月末に完成したばかりの新園舎で年長組10名と園長、理事1名、事務職員2名、保育士2名の計6名が卒園式の練習をしていた。0歳から年中の子どもたち49名は、仮園舎として使っていた赤前小学校のすぐ上にある漁村センターでお昼寝の最中だった。仮園舎には職員が8名いた。

園長の**小関憲一先生**（昭和29年生）と、主任保育士の**佐々木未緒先生**（昭和61年生）に当事の様子を聞いた（取材日:2015年7月24日）。

まず、お昼寝中の仮園舎の方は、揺れが大きかったので、布団を被せて身を守り、揺れが収まってから避難準備を始めた。園では、ずっと以前からお昼寝時にはスモックと靴下を脱ぐだけで、パジャマに着替えさせていない。非常時を考え、迅速に行動するために必要なことだと考えているからだ。

全員が園バスに乗り込み、近くの赤前小学校に避難した。その後、職員が交代で仮園舎に戻り、お菓子や飲料、子どもたちの上着などを運んだ。仮園舎は、老朽化していたため、屋根の一部が落下し、2階の天井が落ちたが、幸い園児にも先生たちにもケガはなかった。

赤前保育園の園舎は、赤前地区の避難場所に指定されている久保田山の麓に建設されている。その地は、そもそも津波経験者を含む建設委員会のメンバーが、津波を想定して他に複数候補地がある中から選定された場所である。そのため、震災前は、津波の危険よりも火事の危険の方がより現実味があったという。

しかし、今回の地震はあまりにも大きかったため、念のため新園舎にいた子どもたちを久保田山へ、園の前の道を通って避難させることにした。園の隣の工場の人たちもそこへ避難していた。卒園式の練習のために一時的に新園舎に来ていたので、上着を着ていない園児もおり、工場の人が上着を貸してくれた。

「現実味があまりなくて、時間的な感覚もなく、どれくらいそこにいたか時間はわからない」と佐々木先生は話されているが、暗くなる前までは山にいたという。子どもたちは、いつもより大人しかったが、落ち着いていて、1か所に集まって話をしたりしていた。眼前の状況を見て涙を流す工場の人を見て、不思議そうにしていた子もいたという。

連絡がとれず、防災無線もよく聞こえないので、仮園舎の方の様子はわからなかった。そのため、園長が仮園舎に向かい、最終的に無事に全員が合流することができた。

中には、津波が来る前にお迎えが来た子もあり、その都度対応して引き渡していたが、その時にはまだ、津波の危険性を考慮していなかったという。幸い、皆無事であったが、園からは海添いの道路を通らなければならず、保護者も一緒に逃げるべきだったと、園長たちは振り返る。

そのため震災後は、一緒に避難するように避難マニュアルを改めた。加えて、保護者に向けて災害時の連絡マニュアルを作成配布し、災害用の掲示板を設けて一斉にメールを送信する体制も整えた。

また、震災後、園庭からそのまま山に逃げる避難路を作った。現在は、そこに誘導灯やロープを取り付け、年に2度、草刈りなどの整備を行っている。子どもたちは、普段、遊んでいる慣れた道を通って避難することになる。

さらに、震災時、隣接する工場ばかりでなく、近くの工業高校の生徒たちも園前の道を通って避難することがわかり、こちらとも避難の際に園児の引率に協力してもらえるような関係を築いているそうだ。

「震災の記憶を風化させないために、何より伝えていくことが大切です」、と園長は言う。「園児にも大きな地震が来たら山に行きなさい」と常々伝えており、県外からの視察も積極的に受け入れ、所属する保育団体などでも話をしている。

6　宮古保育園では

市内中心街にある宮古保育園は、園舎に水が入り、半壊だった。**鈴木哲夫園長**（昭和10年生）は、避難訓練に力を入れている（取材日：2015年7月25日）。

あの日の午前10時に地震発生を想定した避難訓練していた。そのため、子どもたちは怖がらずに避難できた。「あらためて訓練の大切さが身に染みた」という。

震災時の行動

宮古保育園は、常安寺保育園と姉妹園で、いずれも理事長は常安寺住職である。第1避難所は常安寺保育園で、第2避難所は宮古小学校になっている。常安寺保育園には備蓄品の準備がある。

地震発生時は、子どもたちはまだお昼寝中でした。電気が落ちたため、避難指示の放送ができない。揺れでまっすぐに歩けない。（＊園長は）大声を出して子どもたちを起こして、寝間着のまま園庭に出すように指示しました。建物が崩れそうなくらいの揺れでした。

すぐさま宮古小学校に避難を開始しました。寒いので履物と上着を中にとりに行かせたかったのですが、このあたりでは「地震で外に避

難したら戻らない」というのが鉄則です。今回の地震では、そうした教訓が忘れられたゆえの被害が多かったのです。

「あれほどの揺れであれば、津波は来る。」園長にそう確信させたのは、仙台の科学博物館の地震体験だった。それで津波警報が出る前に避難を始めることができた。

小さい子はベビーカーに乗せました[注(7)]。道路の真ん中に（＊園長が）立って車を止めて、子どもたちを渡らせ、「とにかく高いところに行こう！」と言いました。最終的に常安寺保育園に行くというのが頭にありましたが、「高いところ高いところ」と言ったのです。道の選択もそれが基準となりました。

学校では、電気も暖房もなく、子どもたちは寝間着のままだったので、学童の家で毛布を借り、落ち着いてから常安寺保育園に向かいました。

避難の際、「引き渡し緊急連絡簿」だけは保育士が持って出ました。宮古小学校に迎えに来た保護者に何人か引き渡しました。最終的に子どもをすべて帰し終えたのは夜の8時でした。

ただ、園長が今でも反省しているのは、職員を現地解散としたことだと言う。車は皆流されていたし、道路が分断され結局自宅までたどり着けない職員が複数いた。中には家を流された職員もあった。

被害の大きさを知ったのは、翌朝になってからでした。保育園に来てみたら、ヘドロが園庭を埋め尽くしていました。園舎は1メートル30センチ水に浸かりました。壁とドアの桟やガラスはそのままあったのですが、排水溝から水が入り、中はぐちゃぐちゃでした。

地震が起きて3日目に「半壊」の判定を受けました。また、全国の私立保育園連合からの支援で、園庭のヘドロの除去をして、放射性物質や、ヘドロによる破傷風の心配もあったので、30センチ掘ってオスバン（＊消毒液）を撒き、花輪の砂を持ってきて土の入れ替えをしました。6月の園再開を目指していましたが、5月の連休明けになぜか銀バエが大量に発生しました。床を乾燥させて、11月7日に、園での保育をようやく再開できました。

それまでは、常安寺保育園で一緒に保育をさせてもらいました。運動会も合同で行いました。ありがたかったのは、保護者から苦情がでなかったことで、ずっと、宮古保育園での保育再開を待っていてくれました。

7　そけい幼稚園では

磯鶏地区の中でも海寄りにある、そけい幼稚園では、園庭に水が入り、園舎の一部が床上浸水の被害を受けた。**晴山洌理事長**（昭和9年生）と、**晴山正子園長**（昭和16年生）のお二人に避難の様子と園の被害状況について話を聴いた（取材日：2014年3月20日）。

3・11の様子

地震発生当時、預かり保育の子どもが33人いました。中には、下の子が病気で、上の子を預けて宮古病院に行き、被災してそのまま3日帰れなかったお母さんもありました。安否確認ができずにいて、とても不安だったと言っていました。

揺れが収まってすぐに、磯鶏小学校への避難を開始しました。すぐに子どもたちを外に出して、先生たちが防寒着を抱えて逃げたのが、準備時間の短縮になってよかったです。それは、避難訓練でも行っていました。小走りで大人なら8、9分、子連れでも12、3分という距離です。小学校の手前の磯鶏修道場まで逃げれば、安全だと判断しました。小学校に通じる「わむら公園」の脇の道は、急ですがすぐに高台に出られます。逃げる最中に、一緒になった近所の人たちが、そちらの道を勧めてくれたのですが、先頭を走る園長がそちらを見ると、雪があり、子どもたちを連れては滑って容易には歩けないと思ったので、修道場の前の道を行くことにしました。とっさのことでしたが、長く磯鶏に住んでいるので、どの道を行くべきかすぐに判断できました。

ただ、前を向いて走ったし、避難しながらも、津波が来るとは半分は信じていなかったのですが、職員も全員助かりました。子どもの安全だけを考えていました。何があっても決して津波の来る方向に戻っ

てはならないと思っていました。

日頃、保護者には、避難が必要な時に幼稚園に来ないでほしい、とお願いしていた。だが、幼稚園まで車で子どもたちの避難先を聞きに来た方もあった。理事長は誘導するため園の前に1人残った。

園と市民会館前の間の路上で待機して、保護者を磯鶏小学校へと誘導していました。最後のお母さんを見送った時に、津波が迫ってきました。津波は市民会館の建物の中を通って、西側入口ドアを突き破り、大きな音とともに吹き出し、幼稚園を挟むかたちで道路を回り込んで来たのです。

私は、園庭を突っ切って走って逃げて、線路近くで最後の避難者が運転する軽トラックに乗せてもらい、間一髪、生き延びることができました。

避難先で

小学校まで避難したものの、余震が激しく続く間は、危険なので校庭にいました。すごく寒かった。しばらくして余震が少しおちついてから体育館に入りました。地域の人たちも、たくさん避難して来ていました。地震直前まで体育の授業で椅子を使っていたようで、体育館の中には椅子が散乱していました。園児たちは、余震が来るたびに椅子の下にもぐって頭を守りました。常日頃、この訓練をしていたからです。無事に避難できたのは訓練の賜物でした。

理事長も園長も、「子どもたちには、言葉で理屈を説明するよりも、身体で覚えさせるのが何より大事だ」と、口を揃える。そけい幼稚園では、毎月火災か地震かを交互で訓練をしている。また、季節によっても訓練の内容を変えている。夏は「中ズック」だけでも平気だが、冬は体温低下を防ぐために防寒着や靴がいる。防寒着を抱えて逃げるので、時間もかかる。

11日の夕方までにほとんどの子が保護者に引きとられました。夜になっても残っていたのは7、8人でした。毛布を近所の人が貸してくれたりもしましたが、寒いし、このまま体育館で夜を過ごすことはできないと判断しました。幸い、学校の近くに親戚の家があり、そこの温かい部屋で夕食を出してもらいました。一番遅くまで残っていた1人は、次の日の朝9時頃にようやく迎えが来ました。

また、父親と連絡がずっと取れず、不安で落ち込む母親を3、4歳の子が気丈にも「お父さんは強いから絶対に帰ってくる」と励ましていたと、後になってから聞きました。

災害対策は万全に

そけい幼稚園で話を聴いた中で印象的だったのは、災害に対する準備を徹底している点である。園長は、阪神大震災の2年くらい前に、もし大きな地震が来たら子どもたちはどうするだろうと思って以来力を入れてきたという。

迎えは警報解除のあとで

震災後、園の方針として大きく変えたのは、引き取りの方法である。津波常襲地域では、避難前に保護者に引き渡しをすることは命取りだとわかった。

そけい幼稚園でも震災後は、「まずは保護者が自分の安全を確保し、警報が解除されてから直接避難所に迎えに来てほしい。その間は、園が子どもの命を必ず守るので、信頼してほしい」と、周知を徹底している。

8　商業施設「キャトル」内「つどいの広場すくすくランド」では

街の商業施設に子どもと来ていて地震に遭った人もいる。

駅前にある商業施設「キャトル」の5階（最上階）には、社会福祉協議会が運営する「つどいの広場すくすくランド」がある。ここには、おもちゃや絵本などが用意されており、多くの親子が遊びに来

る。地震発生時の様子を元職員の方（昭和35年生）に聞いた（取材日：2014年7月17日）。

3・11の様子

通常、すくすくランドでは、平日の午前中はたくさんの利用がありますが、午後は、それほど利用者は多くありません。地震発生の直前に、4歳と2歳の子を連れた母親が来館しました。父親の転勤で宮古に来ている家族で、頻繁に施設を利用していました。

地震が発生した時、職員3人と親子3人は全員かたまって、すぐに廊下に出ました。長い揺れでした。キャトルの職員も合流しました。コインロッカーが倒れて崩れて、大きな音がしました。恐怖のあまり子どもが泣き出すと、母親も泣きだしました。地震の揺れが収まるまで皆で丸くなって、「大丈夫」とお互いに声を掛けあい、励ましあいました。

その後、階段で1階まで下り、キャトルの隣にある駐車場に出ました。店長の誘導でスーパーの買い物客たちも集まっていました。

津波が来るという放送があったので、先ほどの親子を車まで送りました。親子ははじめ、市役所の方面に逃げようとしていたので、海や川から離れて盛岡方面に向かうよう誘導しました。

自分たちは、「いっせきさま」（館合近隣公園）に避難しました。キャトルから一番近くにある高台です。高台から閉伊川に津波が上がるのを見ました。街の方も交差点まで水が来ていました。警察がゴムボートを出していました。しばらくして、寒そうにしている人がいたので、「すくすくランド」に毛布を取りに戻り、提供しました。

運営再開まで

キャトルが営業を再開したのは、4月半ばだったので、すくすくランドの職員は、各地の避難場所を回って、絵本の読み聞かせや遊びをしました。

震災後、施設がオープンした当初は、利用者の多くが被災していない人でした。当時、被災した人には、施設まで子どもを遊ばせに来るような余裕がなかったのではないかと思います。

多くの店が津波に流された中、キャトルは早めに営業を開始しました。そのため、土日になると大船渡や大槌方面からもお客が来て、すくすくランドを利用しました。市外から訪れた母親たちは、「まだ宮古は遊べるところがあっていいね」と言っていました。

9　田老地区の状況

(1)　田老保育所では

以下は、田老保育所が役所に提出した報告書からの抜粋である[注(8)]。

「3月11日

年長組卒園に向けての製作中。年中、年少、未満児組午睡中。子どもの安全確認。午睡から目覚めさせる。泣きださないように声がけしながら着衣の介助。防寒着着用し、児童玄関に集合点呼。迎えが来た子は確認をし引き渡す。園舎回りの安全確認。第3避難所（田老公民館）へ誘導。誘導途中、迎えあり返す。田老一中校庭で一息つき、点呼。ゴーゴーと大きな音、〝つなみ〟の叫びに山の斜面に向かって走るよう声がけしながら誘導。山の斜面を押し上げ、中学生の協力を得ながら高台へ。お寺の墓地に避難させる。中学生、一般の方々と様子を見守る。子どもたちには声をかけながら、シート毛布で暖を取るようにし待機させる。日没と同時にお寺の一室を保育所用にと提供していただき、子どもたちに休息をとらせる。座布団、毛布、ストーブで暖をとり一夜を明かす。夜中、明け方と保護者も一部合流。27名　保護者4名。周辺の様子情報の確保に努める。保育所全流出。保育所への迎え引き渡し50名。避難途中、中学校校庭30名。」

「3月12日

夜明けとともに保護者の迎えが来る。個々の状況を聞き次どうするのかを聞いて引き渡す　朝食2人で1個のおにぎり。地震と津波警報発令にて外へ。前日の墓地へ避難する。裏山の火災で消火の準備になり本部長の指示のもと、線路を歩いて北高校へ避難。夕方に最後の子の迎えあり。北高校職員の炊き出しの手伝いをする。今後について話

をし。2泊目。北校へ移動時4名3世帯。」

短いながらも緊迫した田老保育所の避難の様子がわかる資料である。また、当時、田老保育所に勤務していた保育士の**外舘恵子先生**（昭和32年生）の証言も得ることができた（取材日：2015年9月17日）。

田老保育所は、被災して跡形もなくなってしまいました。まさか、あんなに大きな津波が来るとは思っていませんでした。

田老は、津波に敏感な地域なので、通常の避難訓練のほかに毎月1回「安全の日」を設け津波から走って逃げる訓練をしていました。私は、その年に赴任したばかりで、正直、なんでこんなに走るの？　という気持ちがありました。しかし、4月は年長児で5分近くかかっていたのが、3月には1分ちょっと、未満児でも3分くらいで高屋敷避難所に着くようになっていたので、震災時に「安全の日」の効果が出て助かったと思っています。

以前の避難場所は、それ程高台ではない民家のある場所だった。トイレ等を貸してくださいと協力はお願いしていたものの、毎月の反省で「なぜ、避難所がこの場所なのか？」と、疑問の声が出ていたと言う。そこは、「園舎が川沿いにあるので、津波は川を上って来るから、すぐ前の橋を渡るのは危ない。とりあえず山際の方に行って、そこから別の場所に行く」という指導があって選定した場所だった。

先生も「なぜ、海の方に向かうのかな？」という思いが常にあったそうである。その避難場所は山際にあったのだが一旦海側に向かう道路に出なければならなかったからだ。

そうした中、田老保育所では3月の避難訓練の設定を担当者が考えることになった。

当時、主査の私が担当でした。震災のちょうど2日前の9日の朝に、「公民館（田老一中隣）まで逃げたことがないので、行きたいと思っている」と所長に話したところ、その昼に注意報が出たので、いつもと違う場所（公民館）に避難してみようということになりました。

実際に避難してみると、そこは屋根もあり、広くて、人もいて、安心できる場所でした。また、時間的にも15分くらいでそれ程遠いと感じませんでした。途中の国道の手押し信号は、4列でも6列でもいいから1回の青信号で渡るようにしようなどと、職員間で話しました。そのため、大震災の時も「公民館だよね」と、迷わずそちらへ逃げました。

そして、公民館隣の中学校の校庭入り口で一息ついていたら、「津波だ！」と声が上がりました。振り返ったら、もう津波が来ていたので、あわてて校庭を走って山際まで行き、避難誘導車から子どもたちを下して、山を駆け上がりました。途中で中学生の助けを借りながら、子どもたちの手を引いて、道のない山を登ったのですが、そこは初めての所だったので「この山の上はどうなっているのだろう？崖ではないかな？」などと、不安でした。そのため、「転勤したら早い時期に公共の建物だけではなく、地図上でも山の位置など知っておかなければ」と、反省しました。

防災用品の備蓄については、以前から、大きな登山用リュックに毛布やブルーシートなど色々なものを入れて避難訓練などの際に、給食担当者や保育士が背負って逃げる練習をしており、役割分担をしていたので、震災の時も、指示を待たずともそれぞれ背負って避難しました。当日は寒かったので毛布があることで助かりました。震災後は、持ち物を見直して、その時足りなかったもの（懐中電灯やロープ、軍手など）を入れています。

⑵　その時、母親は

千鶏・津軽石地区でも問題になったことであるが、次には、町全体が避難する中、園児を引き取った後の母親たちが、その後どのような行動をしたのかを田老の事例から2例紹介する。

①　赤沼山に避難

田老で育ち子育てをしている**花輪香代子さん**（昭和48年生　取材日：2014年7月16日）は、4人の子どもの母親である。

3月11日、上の子2人は小学校に、その下の子は児童館に、花輪さんは末の子と2人、館が森の自宅にいた。末の子がお昼寝をしている時に大きな揺れが来た。「物が落ちるし、コーヒーも溢れるし、テレビもすごい揺れだったので、おかしいこれはヤバイ。絶対津波が来る」と思ったという。

児童館に引き取りに行く

その後、児童館にいたママ友から引き取り要請の連絡を受け、すぐさまオムツを替え、子どもと貴重品を入れたリュックだけを車に乗せて児童館に向かいました。自宅から小学校までは、1・2キロ、児童館までは2キロないくらいの距離です。貴重品の入ったリュックは、2日前の地震の際に、なんとなく嫌な予感がしてまとめておきました。

途中、親戚のおじさんが「どこ行くんだ?」と声をかけて来ました。「じゃあ、もう迎えに行ったならそのまま北高に行って帰って来るなよ、津波来っから」と言われました。

なぜか戻ってきてしまった

でも、そのまま北高の方に逃げればいいのに、なぜかなんとなく家に戻って来てしまいました。貴重品の入った荷物も持って来ているから、家に戻ることはなかったのに。今思えば、少しでも小学校にいる子どもたちの近くにいたかったのだろうと思います。

車から降りたら、先ほどのおじさんがまだそこにいて、「なんで戻って来た!家に入らないでそのまま、赤沼山に上がれ!」と言われました。すぐさま末っ子を抱いて、上の子の手を引いて山を登りました。おんぶ紐を持っていなかったので、ずっと抱いていなければならず、大変難儀しました。

高台に避難する

高台に着いて、5分もしないうちに、サカベ山の方の波がどんどん減って行くのが見えました。しかし、子どもたちは薄着だったので、寒がっていました。服を取りに戻ろうかと一瞬思ったのですが、「津波の時は戻るな」と言われるので迷いました。

そのうちに、波が堤防を越えて襲って来ました。津波に呑まれて自宅が流れていくのを見ました。気が付くと上の子が、ママ友たちについて奥のお墓の方に走って行ってしまいました。怖かったので、少しでも高いところに行きたかったのだと思います。何も持ってないのに。子どもの物のことばかり考えていました。しばらくして、諦めて、上の子のいる方に向かいました。

うす暗くなってから、赤沼山からさらに役場に避難して、一晩過ごしました。小学生の子どもたちは、先ほどのおじさんが自分の孫と一緒に引き取って連れて来てくれました。津波で自宅も車も失いましたが、おかげでその日のうちに家族全員が無事に合流することができました。その晩は、家が無事だった人から差し入れてもらったおにぎりやおむつなどを、役場に避難してきたママ友たちと分け合いました。

その後、北高が避難所になったので、役場から移動することにしました。線路を歩いて行きました。子どもにおにぎりを2人に1つもらったのですが、子どもは食事をとりませんでした。ペットボトルの水を、キャップに1杯ずつ分け合って飲みました。1歳の子は、まだ母乳を飲んでいたので、本当にありがたかったです。ぐずり始めたときにも含ませておけばいいので。

支援物資は、4日目くらいから少しずつもらいました。また、避難所にいたときは、ママ友たちの間で情報交換をしていました。

育ての親の遺体確認

堤防の内側に住んでいた育ての親（おばさん）とその娘さん夫婦が津波に流されてしまいました。脚が悪いので、車に乗って避難しようとしたところに波が来たらしいです。おばさんのもう1人の娘さんと一緒に遺体の確認をしました。おばさんの娘さん夫婦のご遺体は川の向こうで見つかったのですが、おばさんはまだ見つかっていません。

② 中学校裏山に避難

田老の**前田恵美さん**（昭和44年生）は、震災当時16歳だった子どもを筆頭に6人の子どもの母親である。あの日は、子どもの1人を田老児童館に預けていた。児童館へ引き取りに行った後の行動を聞いた（取材日：2014年7月16日）。

3月11日の避難の様子

3月9日の地震の時は、注意報だったので逃げなくてもいいと思ったのですが、11日の時は違いました。地震直後に下の子どもたち（当時3歳と1歳）を連れて、その上の子を引き取りに児童館に車で行き、すぐに小学生の子たちを迎えに学校に向かいました。

ちょうど、下校時間だったので、小学生たちは校庭に待機していました。同じく小学生の甥と姪たちも引き取り、自宅のあった館が森に近い出羽神社に避難しようと思ったのですが、国道は混んでいるだろうと考え、山側の道路を第一中学校まで向かいました。堤防の方を見たら、もう波が水煙を立てていました。

すぐに、中学校の校門前に車を乗り捨てて、小さい子どもを抱いて上の子たちを走らせて、間一髪、中学校の裏山に逃げることができました。中学生たちも既にそこに避難していました。避難する際、腕に抱いた子どもが重くて、持ち出したバッグを1つ捨てました。途中で出くわした田老病院の看護師さんに下の子をお願いして、なんとか上まで上がることができたのです。

その後、「もっと後ろに下がれ」と言われたので、お墓の方まで行きました。

避難先での夜

前田さんたちはお寺に行ったものの、既に人でいっぱいだったので、役場に移動することにした。

宮古商業高校に通う一番上の子は、高校が大丈夫だと聞いたので、いずれ会えるだろうと思っていました。

役場の事務所の3階で、花輪香代子さんたちと隣どうしになりました。その晩もらったおにぎりを半分ずつにして食べました。いろんな人が子どもたちに気を使ってくれて、飴やお菓子をくれました。

家を出るとき、おむつを片手でつかめるくらい持って出たので、花輪さんにも数枚分けました。事務所に保存していたナプキンをもらって、おむつにはさみ、おしっこをする都度それを替えました。おむつを1日1枚と決めて大事に使いました。

津波を振り返って、前田さんは次のように話す。

まず、津波は来るものだと思って、すぐに逃げるようにしないといけない。特に、子どもが海に近い低いところで遊ぶ時などは気を付けなくてはなりません。もしもの時のことを、家族で話し合いをしておくことが重要だったと思います。

小さい子どもがいるお母さんは、抱っこ紐はすぐ使えるようにしておいた方がいいです。走って逃げる時に抱っこ紐がなくて困ったからです。

さらに、学校では、たまに裏山に逃げる訓練をしていたものの、津波への対策はこれといってしていなかったように思います。また、注意報の時の対策について、家に帰すか帰さないかの判断基準がありませんでした。中学校の先生は帰さないと判断して、いち早く子どもたちを避難させました。中学生の子どもは、あの日、学校があったから命が助かったと思っています。高校生の子どもも家にいたら、たぶん逃げなかっただろうと思います。

10　避難の必要がなかった施設では

では、地理的に津波の影響のなかった保育所では、あの日、どのような状況で、どのような対応がなされていただろうか。

(1)　佐原保育所では

震災時、佐原保育所に勤務していた**涌田広重先生**（昭和33年生）は、3月11日を振り返り、次のように話している（取材日：2015年9月17日）。

保育所は、地形的にはまったく津波などの心配のない場所ではあり

ました。でも、他所もそうですが、園舎がかなり古く、2日前と11日と大きな地震が続いたので、当時の所長は、園舎が壊れたらどうしようかと、心配したと話していました。

また、その時は、もう必死だったので、子どもを引き渡す時に、どこに帰るか確認をとったかどうか、記憶があいまいになっています。

その日の最後の方のお迎えで、「自宅の2階まで水が入った」と言って来られた保護者がいて、その時点でようやく、今までにないような津波が来ているんだな、という状況がわかりました。

同じく、A先生（50歳代）も、「3月11日の地震の後、いつものマニュアル通りに地震時の対応をしました。地震後に2世帯が迎えに来られました。1人は鍬ヶ崎からでした。でも、その時は、まだ津波という意識がなかったので、どこに行くかという確認はしていませんでした。

そうこうしているうちに、被害を受けて、家が流されたなどの情報を持ちながら、保護者が迎えに来られるようになりました。それで、避難所に行くということでした。布団がないので、午睡用に保育所に置いている布団を受け取りに来たという、ご家庭も何軒かありました」と話している。

結局、すべての園児を保護者の元に帰すことができたのは、次の日の朝、8時過ぎだった。

(2) ひかり幼稚園では

森分和基園長（昭和51年生）によると、岩手キリスト教学園ひかり幼稚園（取材日：2015年9月18日）では、3月11日は、午前保育だったので、11時30分に降園になった。震災時、幼稚園にいたのは、預かり保育で残っていた10名以下だったが、直ちに園児それぞれのロッカーの中や、テーブルの下に身を隠すよう指示した。

そして、16時から17時までには、無事に保護者への引き渡しが終わったそうである。共働きの家では、祖父母が迎えに来たが、孫がいるから避難したという人が少なくなかったようだ。

園児も家族も職員も全員無事であったが、家の流出や離職を被った家庭はあった。また、園の方では、壁が破損し、当時浸水域にあった教会においていた園バスが水没した。

地震後、すぐに停電となった。テレビもラジオもつかなかったので、園長は、携帯のワンセグで情報を得ていた。そのため、地震直後に、責任を感じたバスの運転手が園まで来て、バスを取りに行ってもいいかと申し出た時に、津波が来ているからと止めることができた。

また、いつ電気が復旧するかわからないと考えた園長は、自分の携帯だけをつけて、他の職員の携帯の電源を切らせた。混乱の中、電池を温存させて、連絡手段を確保しておくためだった。

園には津波注意報／警報時の簡単なマニュアルはあるが、震災前も今も、マニュアルにこだわって被害が出ることのないように、臨機応変に対応していく方針だという。

園長は、「身の安全を確保する行動をとることと、子どもの命を預かっている園を信用してもらう、という基本的な考え方を共有していれば、あとは状況に合わせて臨機応変に行動するのが重要だ」と話す。

(3) いずみ保育園では

井川典久事務長（40歳代）によると（取材日：2015年9月17日）、千徳駅付近にあるいずみ保育園では、地震の揺れが来たとき、子どもたちが昼寝から覚めるころで、職員は3時のおやつの準備をしていた。当時、保育園にいたのは、0歳から3歳の園児で、職員は17名いたという。

避難訓練は月1回。火災、水害（閉伊川の氾濫）、地震などを想定して行なっており、地震の時はむやみに外に出ない、慌てない訓練をしていました。だが、今回の揺れは長く大きい。身をかがめて子どもたちを部屋に集めました。

地震が収まってから、まもなく防災放送で大津波警報発令のアナウンスを聞きました。ただの津波ではないという緊張感が伝わってきました。津波が襲ってくる。閉伊川の底が見えるくらい水が引いていま

した。だが、水は堤防を越えて保育園までは来ない。

余震が何度もある中、床暖房が全面切れて、寒くなってきました。保育活動はできないが、おやつを食べさせて、おとなしく保護者の迎えを待ちました。

親御さんたちはすぐに職場から車で迎えに来ました。地震発生後、まもなくほぼ全員引き渡すことができました。海側に職場がある方からは詳しい情報を得ました。宮古駅付近まで津波が来たと聞きました。

でも、1人だけ園児のお迎えが来ませんでした。保護者は職場を離れられず連絡も取れない。ずっと待っていたのですが夜になっても来ない。保育園の職員を返して、家の近い私が預かり、お迎えに来たらわかるように、園の前に園バスを停めて、寒いので中で暖を取りながら、6時、7時まで待ちました。結局、園長の自宅で園児を預かり、ごはんを食べさせて布団に寝かせ、私は門のところに停めた車の中で朝まで迎えを待ちました。

次の日の朝9時過ぎになって、井川さんは、保護者の職場まで様子を見に行ってみた。

どうしようもないくらい街がぐちゃぐちゃだった。折れた電柱。毛布が掛けられた死体。道がない。行ける場所を探して通って海側にある保護者の職場まで行ってみました。市役所付近は、道という道がない。瓦礫の山だ。職場ですぐに園児のお父さんに会えたのですが、結局、2日目の夕方になって迎えに来られました。

園舎に被害はなかったけれど、オール電化なので停電で給食が提供できず、しばらくお弁当を持参してもらっていました。また、通園する人数も少なかった。給食を含む通常保育に戻れるまで、しばらくかかりました。

いずみ保育園では、お昼寝のときパジャマに着替えさせている。マニュアルでは、いざという時、着替えはしないで避難する。火事のときも命優先で靴を持って逃げることになっている。また、筆者の取材時には、震災を受けて津波を含む水害に対するマニュアルを再検討しているとのことだった。

また、入園時、非常ダイアル伝言171への登録を保護者の人に徹底してもらっている。大きい災害時の連絡は、確実に言葉で伝わるように基本、電話連絡網で行っている。

さらに、園では、2011年以降、警察や消防に迅速につながる非常警報装置ボタンを設置した。水38リットル、乾パン60名分、電気が使えなくても点くストーブ（灯油）、防災リュック、灯油、災害時用のパン、オムツなどを備蓄している。防災リュックも、もともと各部屋に1つずつ、計7つ設置してあるそうだ。

B　その時、どうやって子どもを守ったか（小学校編）

1　鍬ヶ崎の状況

(1)　鍬ヶ崎小学校では

鍬ヶ崎の**川部淳一さん**（昭和32年生）は、震災当時、鍬ヶ崎小学校6年生の子どもがおり、父母の会会長をしていた。川部淳一さん、恭子さんご夫妻に話を聴いた（取材日：2015年3月6日）。

持ち出したもの

地震発生直後、避難リュックとカメラを持って避難しました。カメラを持って行ったのは、卒業式が間近だったので、卒業式の祝辞で言及できるかと思っての事でした。まさか、こんな大変なことになるとは思ってもみませんでした。避難リュックの中には、10円玉・親戚の連絡先を書いた住所録、ティッシュ、サランラップ、新聞、ラジオ、懐中電灯、ナイフ、紙皿などを入れていました。

避難経路はもともと決まっていました。鍬ヶ崎では、ずっと毎年3月3日の昭和の津波の日に、サイレンが鳴ると、神社か小学校に避難する訓練をしていたからです。周りに声をかけながら坂を上り小学校に向かいました。学校では、子どもたちが校庭に避難待機していましたが、消防の七分団の団長が来て、「ここでは危ない」と言うので、クラスごとに整列して、さらに熊野神社に避難しました。子どもたちは

泣いていませんでした。小学校に避難していた人も皆、神社に向かいました。

津波の襲来とともにものすごい音がして、あたりに石油の匂いが立ち込めました。防潮堤のないところにあったタンクが流されましたが、幸い火はつきませんでした。津波は物を壊して、何もかも無くしてしまう。学校に持って来ていたもの以外は何もない状態になりました。子どもにしたら、とんでもないことです。避難先では、消防団（七分団）の団長と校長先生だけが消防無線で情報を得ていましたが、他の人にはわざと情報を知らせませんでした。

この時、鍬ヶ崎小学校では、心理面への配慮から子どもたちに津波を見せないよう、小屋に対面させて座らせていたと聞いた。まずは見せないことが、重要だとする校長の判断であった。

子どもの引き取り

それから後、多くの保護者が避難先の熊野神社に子どもを引き取りに来た。その状況について川部さんは、次のように話している。

児童は、保護者に神社で引き渡されました。笹川校長をはじめ当時の先生たちはとても信頼できる方々で、子どもたちには誰もケガがなかった。鍬ヶ崎小学校の児童のうち3分の2は、上の方の佐原地区から来ていましたが、その子たちは親に引き渡して自宅に戻りました。残りの3分の1は、下の方に近いので被災している子が多く、その後も避難所にいました。引き取りに来られない子は、家庭科室で先生が世話をしました。

一方、当時の校長である**笹川正先生**（昭和30年生）は、その日学校に戻った後の状況を以下のように話している（取材日：2015年7月24日）。

震災の日、5時過ぎに熊野神社から学校に戻ることにしました。その時分にもまだ迎えを待つ子が30人くらい残っていました。3階の西側の一番奥（海から一番遠い）に家庭科室があって、そこに子どもたちを避難させて、毛布でくるんだり段ボールを敷いたりして暖をとらせました。食事は、その昼にたまたま6年生の感謝会があり、先生たちにサンドイッチが配られていたのですが、まだ誰も食べていなかったので、それを子どもたちに持って行って食べさせました。そのため、不幸中の幸いにも、子どもたちはそれほどお腹をすかせることはなかったのです。また、次の日のお昼過ぎか夕方に、リンゴを1箱学校に持って来てくださった方があり、それを4分の1個ずつくらい食べて、急場をしのぎました。

その後、子どもたちは1人を除いて全員引き取られました。残った1人はお母さんを津波で亡くしました。一緒に流されたものの、辛うじて助かったお姉さんと2人、おばあさんの家に届けて、一応学校の役割は果たせたかと思います。

鍬ヶ崎小学校の避難所で

川部さんの証言に戻ろう。

最初は地域の人は皆、小学校の避難所へ行きました。備蓄毛布は4、5人に1枚しかない。食べ物もストーブも電気も何もありませんでした。でも、山の中にある貯水タンクに2日分の水が入っていたので、水道は出ました。自分の店のアイスクリームストッカーが学校のプール前で発見されました。津波に流されて坂を上がって来たのです。寒いけれど食べ物がないので、みんなで中のアイスを食べました。

津波被害

近所の人の家が流されて、小学校の方まで上がりました。家が2つに割れていました。水が来たとき、その家の娘さんは階段の方にいたので屋根に上がって助かったのですが、お母さんは1階の奥にいて亡くなりました。ほんの数㎝の違いが生死を分ける。自分もあの時死んだと思いました。

津波の日以来、長い余震が続いていました。長い地震です。余震が

続く間、ずっと洋服のまま眠りました。

地震の翌日、ひとりで被災した自宅へ行ってみました。その次の日に、今度は、家族を連れて物を取りに行きました。1階と2階の物は何もなかった。3階に置いてあった息子の新しい学生服と、卒業式に着るつもりで用意していた妻のフォーマル服だけは無事でした。地震で倒壊した家はありません。すべて津波にやられたのです。

店を再開

父母会の会長としては何もしていません。それどころではない。生きているのが精いっぱいでした。避難所にいればいいのでしょうが、黙っていられない。何かしなくちゃ。何かやりたい。その思いで軽トラックを手に入れ、震災の翌月、4月26日に店を再開しました。軽トラックは縁をたどって東京の運送屋さんに提供してもらいました。

震災後、最初の2年で復旧の予定でした。災害があることを前提に、もっと早くから復興計画をきちんと立てておけばよかったのに、結局、瓦礫も片付かないまま3年を無駄にしました。土地をもらえるのも何時になるか、何処になるのかわからないから、店舗再開の計画が立てられない。

住民個々の避難を把握するシステムを

地域では非常物資の備蓄はしていませんでした。今は、プレハブの備蓄倉庫が小学校のプールの脇に建っていますが、中に何が入っているかは知りません。年に一度でも住民がどこに避難するかを個々に調べて、避難所ごとに住民台帳に記載していれば、必要な分、食料を確保できるし、食料を受け取りに来なければ、亡くなっているとわかるのではないかと考えています。

(2) 避難マニュアルの見直し

元教育長の佐々木敏夫先生によれば、岩手県教育委員会では、火災・地震・津波・不審者対策を含む『教育委員会管理マニュアル』（平成13年12月）を作成している。宮古市の教育委員会では、それを元に宮古市の状況に合わせたひな型を作り、各学校の個々の状況に沿ったマニュアルを作成するように指示を出した。津波の危険がない地域もあるし、学校によって状況が異なるためである。

各学校では、独自の危機管理マニュアルに応じた避難訓練を、それぞれできれば年に一度、通算5、6回行っていた。

ちなみに**笹川先生**によると、学校教育課長時代に宮古市版のひな型を作成したが、その際、津波への対応に関しては、大船渡の学校からもらったマニュアルをベースに、それを宮古バージョンにアレンジして作った、という。岩手県の中でも大船渡の被害は昔からひどかったので、そういう意味では先進的に取り組んでいたからである。

自宅待機ではだめだ！

鍬ヶ崎小学校でも先述の通り学校独自の危機管理マニュアルを作っていた。だが、震災以前の避難マニュアルでは、実際には通用しない部分があった、と笹川先生は言う。それは、学校に子どもたちがいない時に地震や津波が来たらどうするかという問題で、学校側ではその場合の対応を「自宅待機」としていたのである。この点について、笹川先生は、次のように語っている。

以前のマニュアルでは、「自宅待機」を勧めていたのですが、地震後ぞっとしました。鍬ヶ崎で自宅待機だったら、みんな大変なことになっていました。自宅待機にさせていたらだめだ。今回の地震がもし、登校前だったら大変でした。

「ありゃあ、これは失敗した！」。自分で出した通知でしたが、現場に行ってそのまずさを実感しました。たまたま、今回は子どもたちが学校にいたので無事でしたが、自宅にいたらアウトでした。それで、自宅にいても安全なところに逃げるように指導を変えました。マニュアルから「自宅待機」という言葉をなくして、安全なところに避難しなくちゃならないというのを、再度問いかけながら、情報を集めたという経緯があるのです。

学校側では、震災後、防災意識を子どもたちに浸透させるために、家庭で話し合いをしてもらう材料として、「自宅待機」という言葉を使わない新しい防災マニュアルを配布した。これにより、改めて登下校途中に津波が来たらどこに避難するかを話し合ってもらい、個々の家庭で決めた避難場所の情報を学校に集約して確認できるようにしたのである。

学校からの避難コースを変える

また、児童が学校にいる時に、どう避難するかも再検討する必要があった。鍬ヶ崎小学校では、震災を受けてその手順やコースを見直した。

震災以前の避難マニュアルでは、まず1次避難として校庭に避難する、そして、もっと深刻な場合には、2次避難として熊野神社に逃げるというコースが決められており、それをもとにした避難訓練を年に2度行っていた。

これを変更する経緯と、どのように変更したかを、笹川先生は次のように話している。

（＊避難経路を決めるのは）それは学校の取り組みでした。それも後で後悔しているのです。というのは、普通に街並みがあるときには熊野神社に行くというのは最適なコースだと思っていました。でも、震災後、全部家がなくなってみたら、学校から海に向かって避難するコースだったのです。

それは、あり得ないことでした。海から遠くに逃げるならわかるが、いくら斜めに逃げるとはいえ、海に向かって避難するコースだったと後から気がつきました。短い距離ですから、早く非難することを優先すれば、それはそれで理由づけにはなるけれども、説明がつきません。七軒町（シチケンチョウ）という学校の裏側に沢があるのですが、その沢伝いに避難する。そうすれば昔の旧県道に当たる。旧県道まで上がれば、なんとかなる、ということで、避難コースを変えることにしました。

避難コースを変更する旨の了解を得ようとしていたら、90％の保護者は「いい」と言う返事でしたが、残りの人が「だめ」と言う返事でした。理由は、昔、そこで崖崩れがあったじゃないか、そのようなところを避難道にするとは何事だと言うことでした。それでは逃げ場所がない。消去法でいったのです。ハザードマップを見て調べて、コースを設定していく中で。

また、「日陰の坂」という道があり、鍬小の前の道、あそこを通せばいいじゃないかと言う人もいました。でも、あの道路の歩道の下は空洞になっているのです。地震がもっとひどければ、あれは崩れ落ちる。それから、あの時もそうでしたが、あの道は車の通りが多く、子どもがうかうか歩けるような状態ではなかったのです。そんなことを考えたときには、「日陰の坂」は捨てるしかないコースでした。

七軒町のコースは、がけ崩れがあれば止まればいいので、事前に調べればいいことだ、ということで選んだコースだったのですが、否定されました。

安全を確保するためには100％でなければならない、ということで考え直しました。その時に、市会議員の工藤小百合さん（当時父母の会の副会長）が学校のすぐ裏に菱屋さんの別荘があって、そこまで行けば県道までそれほど遠くない。そのコースを使ったらどうですか、ということでした。それで、そのコースを教育委員会にお願いしました。その後私は転勤になったのですが、そのコースを教育委員会も受け入れて、今はそれが地震時の避難コースになりました。

それに、校舎は校庭に並行して建っているのですが、このコースであれば、校舎の1階の山側の出入り口から出たところに集まって、そのまま菱屋さんの方に上がることができる。そのため、校舎の入り口も作り直してもらって、安全を確保するようにしました。

とにかく、子どもの安全を100％確保できることを目指してそこまでやったのが、23年度。就任2年目のことでした。

鍬ヶ崎小学校に併設されている鍬ヶ崎学童の家に勤めていた**田畑輝彦先生**（昭和9年生）によると、学校にいるときは学校の避難計画があるが、学童の家にも独自のものがあるという（取材日：2015年

3月7日)。

学童の家では、避難場所は上のお風呂屋さん「不動園」に避難することになっています。そこなら休めるし、津波も来ない、人家も近いところです。鍬ヶ崎学童の家の初めからかかわったので、私が不動園に頼みに行きました。学童の家に来ているのは、小学校3年生までの30名足らずですから。小6まで事情があればあずかりますが、4年生以上は1人か2人です。避難計画は、学童の家ごとに避難場所や経路、方法、指揮系統などを決めています。

2　高浜・金浜地区の状況

(1)　高浜小学校では

震災当時、高浜小学校校長だった**大洞晴洋先生**（昭和26年生）を訪ねた（取材日：2015年9月16日）。

1メートル以上の津波が襲う

高浜小学校は、国道45号線を挟んで宮古湾に面しているが、国道から3メートルほど高い位置にあり、8メートルを超える防潮堤に守られていた。高浜小学校は避難所に指定されており、想定では津波は来ないことになっていた。チリ地震の時に高浜地区は大きな被害を受けたが、地区の中央にあった小学校を、より安全な現在の場所に移転した経緯があったからである。

震災後、地域の人も「波がここまで来たのか」と驚いていたという。想定では、45号線の壁で止まるのではないかと考えられていたが、実際は、それを乗り越えるほどの高さの波が襲ってきた。そして、1メートル以上の高さで校庭に入った波は、道路と校庭の間のフェンスをなぎ倒した。

学校裏山に避難する

地震発生。長い揺れの後に続く余震の合間を縫って、校庭に子どもたちを集めた。「大津波警報」の放送が流れる。すでに校庭には迎えの車が十数台入ってきていた。数名の保護者に「連れて帰ってもいいですか」と聞かれた職員から判断を求められた。

大洞先生は、その時の心のうちを手記で、次のように書いている。

「許可しようという気持ちもないではなかったが、メガホンを持って話した。『警報がでているので、もう少し様子を見ましょう。』その時は正直熟慮する余裕はなかった。頭の中は、2日前の注意報時の対応や本校の防災マニュアルが駆け巡っていた。だが、これがとてつもなく大きな判断となった。」

筆者のインタビューでも、「本当は学校に強引に止める権限はないのだが、親御さんの方からも特に反対意見が出なかった。もし、どうぞと帰していたら、道路の方が低いのでどうなっていたか」と、振り返る。

避難所になっていたため、校庭にはたくさん人が集まってきました。消防団の人たちも来ており、フェンス越しに海を見張っていた団員の小笠原さんが「だめだー。早く逃げろ！こっちだ！」と大声で叫んだのです。

大洞先生たちも海の方を見てはいたが、逃げるかどうかの判断が難しかったという。

消防の人たちはフェンスのすぐそばで海を見ていたので、その一言で助かりました。その声を機に、児童89名を含む全員が、校舎裏の高台に急な斜面を走って登って避難しました。その声がなかったらどうなっていたか。

高浜小学校までは津波が来ないという想定だったので、避難所になっていたのです。そのため、そこからより高いところへの避難は想定していませんでした。避難する場所も決まっていない。とっさの判断で避難したことになります。津波が学校に到達したのは、3時30分。小笠原さんの指示からわずか10分後のことでした。上の方から振り返ると、校庭に乗り入れていた十数台の車は波に浮いていました。

後ろ向きで山をどんどん上がる感じだったので、子どもたちはほとんど津波を見ていなかったと思います。途中で担任などが中心になって、子どもたちを上にあげるように指導しました。校長として担任の

先生には、人数を把握することと、ケガのないようにと伝えました。

裏山から金浜老人福祉センターへ

余震が続く中、だんだん暗くなってきました。寒くなってきて、いつまでも屋外の高台にはいられない。そろそろ下に降りようということになりました。今思えば、校舎にもどってもよかったのですが、校庭にあれほど水が入ったところには入れない。校舎に入ろうなどとは誰も考えなかった。地元に詳しいＰＴＡ会長や地域の人みんなで次にどこに行くべきかを相談し、夕方5時くらいになって山を下り、学校の隣の高台にある金浜老人福祉センターに行くことにしました。その後、センターには徐々にたくさん人が集まって来て、本当に混乱した状態でした。

子どもたちの半分以上は、センターで先生たちと一緒にいました。被害の少なかった保護者は夜までに迎えに来ることができました。職員もどこへも行けないので、そこにいるしかありませんでした。食事は、その日の夜は飲まず食わずでした。子どもたちはよく我慢したと思います。また、余震が何度もあり、怖くて寝れないほどでした。

次の日、飲み物やパンがちょっとだけ来ました。みんなに回るほどの量ではなかったので、子どもや弱い人を優先に分け合いました。近くの被害を受けない高いところに住んでいる人が、毛布やストーブを持って来てくれました。ストーブは灯油のストーブが何台かあり、学校からもある物は持ってきました。十分ではなかったですが、そうやって一晩過ごしました。翌日になって、親御さんが子どもたちを迎えに来ました。

学校に詰める

子どもたちを帰したあと、職員は様子を見に行けそうな人からどんどん自宅に戻りました。帰れる人も、帰れなかった人もいました。赤前や鍬ヶ崎の人は帰れませんでした。子どもが心配だからと崎山まで歩いて帰った人もいました。

校長だった大洞先生自身は、3日後の日曜日になってようやく着替えと入浴のために一旦家に戻ったという。その後の数週間は、職員は何人か交代で学校に寝泊まりした。大洞先生もほとんど学校に詰めていたという。そうした情況は、4月に教育委員会から通達が来るまで続いた。

震災後しばらくは、学校に行けば何か情報があるのではないかと思って訪ねてくる人、トイレを借りに来る人が多くいたので、夜でも学校を開けておいた方がよかったのです。自衛隊の人もトイレを借りに来ました。でも、水が出ないので、校舎の裏の池からバケツで水を持って来て汚物を流しましたが、そこも限界になりました。電気も来ない。電気の復旧も高浜付近は遅かったのです。

震災の次の日の夜明け、明るくなって金浜の惨状が見えてきたときにはショックで声が出ませんでした。忘れてはならないけれど、思い出すのは辛い。今思うと、本当に危なかったです。

地域との連携と信頼関係

日頃から保護者をはじめ、地域の人とのつながりを大切にしてきたことが、あの日、学校にいた全員のいのちを救った。消防団や地区の人々、金浜老人福祉センターとの交流があったからこそ、お互いに知恵を出し合うことができたし、迎えに来た保護者を帰さないという校長の判断に従ってもらえたのも、そうした繋がりがあったからだと言えるだろう。

大洞先生の手記は、こう括られている。「震災後、本校を訪れた文科省の方から、大震災を経験され、今後の学校防災で一番大事なことは？と質問を受けた。私は答えた。それは、地域との連携と信頼関係。」（『宮古　今歩き始める』42頁）

震災後の変化

高浜小学校が震災後大きく方針を変えたのは、次の2点である。

① 有事の保護者による児童の引き取りについて

震災前は、警報が出たら保護者は学校に児童を迎えに来ることになっていたが、今は引き取りに来ても帰さない。警報が解除されて、安全が確保されてから学校ではなく避難先に迎えに来ることになった。市内では保護者が児童を引き渡した後に亡くなった例があるので、震災後はどこもそうなっている。そして、学校では、このことを4月のＰＴＡ総会の時の資料につけて周知しているそうである。

② 学校が避難所であったが、有事には金浜老人福祉センター（障害者センター）に避難することになった。

これは地域との連携とも関連するが、避難先について、現校長の**中村登志江先生**（昭和32年生）は次のように話している（取材日：２０１５年９月17日）。

避難の際は、学校から金浜老人福祉センターまでの最短ルートを行きます。1分1秒を争うので、学級ごとに教師が誘導しながら、早く外に出た順に逃げることにしています。高台の福祉センターまでは1分くらいで着きます。津波や震災に関してはかなりお世話になるので、福祉センターとの連携はいつもとっています。七夕集会ではデイサービスに来た方を学校に招いて交流したり、冬場に子どもたちがセンターへ肩たたきに行ったり、3、4年生が上の花壇でお花づくりをしたり。福祉活動交流を福祉センターに絞ってやっています。

実際、最近、地震があり、津波注意報が出たことがあったそうであり、その時の事を中村先生はこう話されている。

避難しに行ったら、福祉センターの方では、警報が解除されるまで子どもたちが座って待てるように、畳の部屋を用意してくれていました。鍬小にいた時に経験があるのですが、屋外に避難した時に、そこが雨風の防げる場所だと安心して待てるのです。ここはとても良い。ストーブやトイレもあるし、子どもたちは、温かい場所でお茶まで用意してもらいました。なかなか警報が解除されないので、結局1時間以上お世話いただきました。（＊付き合いの）何もないところだと、そうもいかないでしょうが、普段から交流を大事にしています。

(2) 高浜児童館では

高浜児童館は高浜・金浜地区限定で、満3歳から6歳の幼児保育と、小学校4年生（＊現在は6年生）までの学童保育を担っている施設である。震災では、床上浸水の被害を受けた。あの日のことを、**松浦隆太朗館長**（昭和23年生）と**加藤美季先生**（昭和40年生）に取材した（取材日：２０１５年９月17日）。

高台の津波シェルターへ避難する

震災時、児童館には年長8名、年中6名、年少3名と、4名の職員がいた。館長は役所からの帰りで、まだ市立図書館のあたりを車で走っている時に地震が来た。

児童館では、年少年中の子どもたちがお昼寝から目覚める頃でした。子どもたちの半分はまだ布団にいて、半分がトイレに行っていました。布団にいる子は、布団に潜り込ませ、トイレにいる子は、引率した先生の指導でトイレにしゃがみこみ、部屋に戻った後はまた布団に潜らせて、揺れがおさまるのを待ちました。年長6名はお昼寝をしないで、和室でクッキーづくりをしていました。まだ火は使っていませんでした。揺れが来た時、いつも避難訓練で指導しているように、和室にいた年長児は、おそらくテーブルの下に潜っていただろうと思います。

写真３　津波が侵入した教室　高浜児童館にて
撮影：松浦隆太朗館長

警報が出たと放送があり、すぐさま避難しようということになりました。マニュアル通り、近くの津波シェルターに避難す

ることにしました。寒いのでパジャマ姿の子どもたちには服を着させて、荷物を持たせました。震災前から水500ミリリットル2本、乾パンが入った緊急避難リュックと引き渡し簿（バックアップ）が入った救急バックが用意されており、職員はこれらとラジカセを持って出ました。

最寄りの津波シェルターは、コープケミカルの社宅の裏の高台にあります。児童館の前の家の脇を通って高台に上る道に出られます。普段からこのコースを通って避難する訓練をしています。

あの日、児童のうち2名は、シェルターに着く前に迎えに来られたので引き渡しましたが、ほとんどの保護者は津波シェルターの方に迎えに来ました。

そのシェルターには、古い備品倉庫があり、中にはストーブや毛布、水などが備えてありました。車で乗り入れることもでき、備品倉庫の脇にはトイレもあります。海の方の民家の人たちもたくさん避難して来ていました。

おやつを取りにいく

市街地にいた館長も、そのまま車で津波シェルターに向かった。

津波襲来直後、館長は、シェルターのある高台から児童館の裏の斜面を降りてきた。下からは上ることができないほどの急な斜面である。子どもたちのおやつを取りに行くためだった。

今思えば、とても危険でした。子どもたちがいるので、食料を確保しなければならないと思い、おやつを取りに山を降りたのです。でも、第2波、第3波が来たら危なかった。震災後になって、情報が出てくれば、あれは危険な行動だったなとわかる。でも、その時は、とにかく子どもたちに食べるものをという思いでした。

津波シェルターで夜を明かす

その日の夜は、皆が津波シェルターで過ごしました。備品倉庫内の4・5畳くらいの狭い空間に、子どもやお母さんたちと一緒にストーブを焚いて夜を過ごしました。毛布を出した棚に子どもたちを寝かせました。毛布があったのでずいぶん助かりました。

外では、山の木を切って焚き火をしました。コープケミカルの社宅の人がお米と鍋を持ち寄って、焚き火でおにぎりの炊き出しをしてくれました。水は誰かが持って来てくれたようでした。シェルターの左奥の方から下りる道があり、その先は水を被っていない地域でした。その地域の方が何人か差し入れに来られました。

次の日のお昼まで、2組の児童の迎えが来ませんでした。消防団の無線で連絡をとり、ようやく保護者の居場所がわかったので、職員も自宅に戻ることになりました。残されたもう1人の子は、お母さんが亡くなっていました。お母さんを探していたのでしょう。お父さんとはなかなか連絡がつきませんでした。おばあさんが金浜地区に住んでいるので、おばあさんに引き渡すために、職員が、山の方の道を通って送って行きました。

津波の被害

最終的に子どもは全員無事だったが、今回館長が一番心配したのは、地震直後に帰した2名のことだった。

しばらく連絡がつかずにいましたが、2、3日後、無事を確認しました。電話が通じないので、帰りに津波に巻き込まれたのではないかと大変心配しました。すぐに迎えに来たおばあさんに聞くと、本当に波に追いかけられるように逃げたということでした。その家のおじいさんが流されて亡くなりました。だから今は、迎えに来ても絶対に帰してはいけない、と考えているのです。

児童館の建物は、床上10センチ浸水の被害を受けた。今も玄関に痕が残っている。

床は全部張り替えが必要でしたし、ストーブもクーラーもトイレも全部やられていました。復旧作業はすぐに取りかかってもらったのですが、園庭に積もった土をはがして取り除き、裏に持って行く作業にずいぶんと時間がかかりました。働いているお母さんたちが困るから、

早く保育を再開しなければならなかったので、高浜小学校の体育館を借りて学童の業務を再開しました。幼児の方は、４月25日が入園式でした。

警報時の引き渡しはしない

避難に関して高浜児童館が震災後、一番変えたことは、警報時の保護者への引き渡しをやめたことである。引き渡し訓練も、今は、「警報が出たのでシェルターに避難しています。警報が解除になってから迎えに来てください」という訓練に変えた。また、児童館では震災後毎年、年度初めに、避難についてとシェルターの場所に関する手紙を出している。

館長は、「震災で重茂や田老地域で、引き渡したために流されたという話をきいて、うちも一歩間違えばそうなっていたので、それは徹底しないといけない。警報時に帰さない、迎えにも来ないというのは大事だ」と話している。

（＊児童館へは）海岸線を通ってくるので、（＊警報発令時は）休みの職員も出て来ない。無理はしない。いる者で対応するということになりました。今回は、津波到達まで時間があったので良かったですが、（＊館長ご自身）一番被害のひどかった地域を通って戻ったので、もし、時間がずれていれば危なかった。堤防があるので、海が見えないのです。それで流された人がいっぱいいます。今は、児童館から海岸線の道を通る車が見えますが、震災前は家がいっぱいあったので、道路は見えませんでした。

3　学校再開に向けた取り組み　―教育長の軌跡―

佐々木敏夫先生（昭和22年生）は、震災当時の教育長である。あのような大きな災害を今まで誰も経験したことがない中で、宮古市の公立学校を束ねる立場にある教育長が、学校再開に向け震災直後からどのような判断を下し、どのように行動したかを聞いた（取材日：２０１５年７月５日）。

(1)　市庁舎で地震に遭う

津波の日は、議会の最終日だったので、本庁舎の６階にいて、ちょうど閉会の時に地震が来ました。教育委員会には議会が終わってすぐに総務課長だけを帰し、部長と私は対策会議があるので、そのまま庁舎に残りました。会議が開かれると思い、４階にいたときに津波を目の当たりにしたのです。

津波が堤防を越えた瞬間に、ここでも危ないかもしれないと、みんなで６階に上がりました。その夜は、もうどこにも出られませんでした。会議を何回もやりました。でも情報が入って来ないし、こちらからも情報の発信のしようがありませんでした。わかっている情報を、何回も繰り返しやっているような会議でした。被害もはっきりわからない。その夜は４階の椅子で休みました。連絡はずっと入って来ませんでした。

次の朝も7時頃、会議があり、随時会議を開くというので、庁舎からなかなか抜けられませんでした。着替えもオーバーもなく、暖房もありませんでした。昼近くになって一旦家に帰りました。道路にはヘドロや水がまだ残っていましたが、普通の靴でずっと歩いて行きました。

帰宅途中に、宮古小学校と山口小学校の避難所の様子を見に行きました。山口小に被害はありませんでした。宮古小学校には体育館近くまで水が入りました。宮古小学校の避難所を見て、校長さんと話して、すごく大変な、何が何だかわからない状況だと思いました。

「子どもたちは無事です、家に帰しました」と聞いて胸をなでおろしました。ただ、避難所に来た人がすごく多くて、その対応が大変だと聞きました。宮古小学校の校長からもらった記録には、「宮古小学校ではその日、11人迎えに来られなかった」と書いてあります。食事は、学区内にある中村せんべい店が「せんべいを千枚持ってきてくれて配布した」とあります。

(2)　安否確認を優先に

自宅に津波の被害はありませんでした。昼食をとって、着替えをもって、長靴に履き替えて、会議が開かれるので、また庁舎にもどりました。最後の会議が夜の7時だったと思います。庁舎に停めた車は流されましたが、家内の車は無事だったので、新里の教育委員会に行って、子どもたちと先生たちの被災の状況を確認すること、安否確認を優先するように指示を出しました。

そのころは、まだ電話がつながっていなかったので、安否確認には職員に足で行ってもらいました。学校を8名、2人組でまわりました。分庁舎の方は車が無事だったので、車も使いましたが、海岸端から先に安否確認にまわりました。だが、3日目でも車で目的地まで行けない所が多かったと思います。私も鍬ヶ崎まで歩いて行きましたが、道路は歩けなかったので、山をまわって行ったし、愛宕も車では行けませんでした。

愛宕は本庁舎の近くですが、船や車が上がっていない道路の裏道を知っているので、そういうところを歩いて行きました。車も人も通れない状況でした。裏道を通って行くしかないのです。人の家の庭を通るとか。二中、鍬ヶ崎も愛宕から山を越えていくしかありませんでした。

3、4日は、浸水区域は歩ける状態ではありませんでした。会議があるので市役所を起点に歩ける範囲で藤原、河南、磯鶏そして、鍬ヶ崎、二中、愛宕、山口、宮古小学校を訪ねました。市役所で会議が終われば家まで歩いて、夜は新里につめて。でも、いろんな見方があると思いますが、教育委員会が新里にあってよかったと思っています。教育委員会では職員がフルに動けました。インフラも別だし。自分たちの仕事のほかに、いろんな便利屋をしました。

愛宕小は高台なので津波は来ませんでしたが、ここでは危険だということで裏の民家まで逃げたようです。山の上の中里団地の集会所まで避難して、児童7名ほどが先生たちと泊まったそうです。小学校では自分の学校が危ない時は、普通は上の道路などに避難することになっていると思いますが、あんなに大きな津波までは想定していませんでした。

ほとんどの学校が避難所になっているので、震災以降、はっきりと2次3次の避難所を設定しました。それまでは何となくこの辺まで逃げれば、という現場の判断だと思います。高浜も千鶏もそうでした。千鶏もあんなところまで津波が来るとは思いませんでした。

2日目あたりに、教育委員会と本庁とがつながる衛星電話が1つ来ました。それから、教育委員会の総務課に、電波がつながる機種の携帯を持った職員がいたので、それを利用したりしました。

児童・生徒・職員の安否確認には1週間以上かかりました。結局、その日学校に来ていた子どもたちの安否はわかったのですが、その日休んだり早退したりした子どもたちの事がわからなかったし、職員の中でも勤務日でなかった人の居所もわからない状態でした。

(3) 4月開校に向けて

初めてのことなので

まず、初めに子どもと職員の、そして子どもたちの家族の（＊教育環境）安否確認をする。正常な学校運営をするためにどうするか、早くそれを取り戻したい、というのがありました。そのために職員を配置するとか、正常な運営をするためには何をどうすればそれが早くできるか、ということを考え、それをクリアすれば軌道に乗るだろう。あとは、学校が始まってしまえば、各学校の校長の裁量だから、そこまでを委員会でどうにかしなければならないと考えていました。

卒業式をどうするか問題

また、12日に卒業式を予定していた学校もあったので、どの学校もこの震災で卒業式をどうしたらいいか教育委員会に尋ねてきました。そのため、3月14日に手分けして歩いて、3月に卒業式ができない学校もあるかもしれないから、学校ごとに日程を決めてやってほしい。来賓は呼ぶ必要はない。体育館などを考える必要はないので、各学校で対応するように、と伝達しました。

実際、3月に卒業式ができない学校もありました。千鶏・鵜磯の校

舎が壊れた学校では、教育委員会と連名で保護者向けに卒業式が当分できない旨のお便りを出しました。結局、４月になってから卒業証書を手渡しました。

校長会議をひらく

後は、当面のこともあったし、学校をやっていない間の子どもたちの暮らしをどうしたらいいか、校長たちが迷っていると思ったので、できるだけ早く、３月23日には校長会議を開きました。

通常、校長会議は30数校を１か所に集めてやるのですが、車が流失したりガソリンが手に入らなかったり、先生たちが新里の教育委員会まで来るのは難しかった。それで、２か所に分けて会議をおこないました。旧市内と田老は市立図書館を、新里・川井は教育委員会を会場にしました。

校長会議では、最初に子どもたちを守ってくれた事への感謝を伝えました。学校にいた子は全員無事だったので、よく守ってくれたとお礼を言いました。そして被災した子どもたちもいっぱいいるので、その春休みの生活をどうしたらいいか、被災した学校については大変だろうけれども、子どもたちのケアをお願いしたい、という話をしました。

市内一斉に４月25日開校を決定した理由

被災した学校は、最終的に４月25日まで学校を開かないことにしたので、宮古市の全小中学校は、４月25日を一斉始業日とすると、校長会議で決定しました。被災していない学校から「うちは、もとの計画通り４月５日に始めたい」という意見も出たが、「だめだ」と言いました。この１年だけは、教育に地域的な凹凸がないように、みんな一緒にやってもらいたいと、校長たちにお願いしました。

授業日数というのは、２００日から２０３日確保しないといけません。授業開始日がぎりぎりいつなら２００日とれるかを計算してもらったら、「５月のはじめでもいいですよ」というのが指導主事の答えだったので、「よし、わかった。４月25日でいこう」ということになったのです。

４月25日と決めた理由は、①まず授業日数を２００日とれるかということ。②それから、被災した家ではお昼を持ってくることも難しいので、給食をいつからやれるかということ。これが一番心配でした。③田老、重茂、高浜もそうでしたが、仮設に入ってしまったので、とにかく車がないと学校までの足がない。それで、スクールバスを手配することになりました。それも全市一斉にでなければならない。そのような手配を、今までやったことがなかったので大変でしたが、それも４月25日だったらできるということでした。④あと一つ大きいのは、教科書会社が被災して、新学期の教科書が流されたので、教科書が揃うのはいつなのかということもありました。それらをすべてトータルしてどれもクリアできるのが４月25日だったのです。

休校期間中の子どものケア

ある学校の先生たちは、今まで習った事の学年のおさらいプリントを作って家庭訪問をしました。また、来られる子どもたちを集めて、午前中だけ補習授業をした学校もあるし、方法はその学校に任せました。中学校については、できるところは部活をしていたので、特に新１年生に部活を見においでと声掛けをしました。

千鶏・鵜磯では、そうしたプリントは渡せませんでした。しばらく学校を閉じます、家庭でお願いします、というチラシを、４月のはじめまで家庭訪問をして配って歩いたと記憶しています。

４月に重茂３校（重茂小学校、千鶏小学校、鵜磯小学校）の校長を重茂小学校に一度集めて会議をしました。新年度どうするかという話です。２校は校舎が被災し使えない状況なので、私は３校を一緒に勉強させるしかないと考えていました。

それらの学校は、震災前から統合したいという話があったのですが、あまり地区の方々はそれに賛成ではありませんでした。それでも、学校が被災して、もう勉強する場所がないし、重茂小学校に通えるようにスクールバスをきちんと用意するので、ぜひ重茂小学校で一緒に勉

強させて欲しいとお願いしました。

幸い重茂小学校は建って1年も経っていない学校でした。教室に余裕があったし、体育館のところにも教室があって、3校だと本当にギリギリだけれども、なんとか勉強できるようにしてもらいました。

とにかく、千鶏、鵜磯、それから校舎の使えなかった田老一中については、4月5日より前に、教育長である私が千鶏小学校に、教育部長が鵜磯小学校に、田老一中には学校教育課長が行って保護者向けに、校舎がなくなって勉強できないということを話して、なんとか保護者からの了承を得ました。

そして、4月5日に市内全学校で保護者を集めて、新年度準備の説明会をしてもらうことにしました。説明会では、入学式、始業式の日程、準備物、そして給食もスクールバスも大丈夫だということ、春休みの過ごし方などを伝えました。

児童の心のケア

春休み中は、被災した学校の子どもたちをケアするために、県、県教委、他県からの臨床心理士やスクールカウンセラーなどの心のケアの専門家に来てもらいました。「心のケア相談員」と言いましたが、被災した学校を中心に各学校、学区によっては仮設を回って、子どもたちの様子を見てもらいました。春休み中に情報を集めておいて、そういうところに行ってもらいました。

親が亡くなった子どもを特に心して診てもらいました。様子が普段通りでない子を回ってもらったのですが、震災で親を亡くした子は高校まで入れて47人だったと記憶しています。継続して様子を見たのは心配な子だけで、そうでないときは何かあったときや、学級で様子がおかしいというような時に担任から情報が上がって来て、相談するということになっていました。

県教委からのボランティア派遣

宮古市でも努力しましたが、県教委に大変助けられました。内陸の学校には大きな被害がなかったので、県教委で内陸の教職員を避難所運営の手助けに派遣してくれました。宮古市でも、被災していない学校の先生に呼び掛けて、避難所の手伝い、泊まって手伝いができる方を募集して、手を挙げてくれた方を配置しました。延べで100名を超えていました。その前に県の方から各避難所に3、4人ずつくらい来てもらったので、教職員ボランティアはかなりの数いたと思います。3、40人を1回のクールで来てもらったので、延べでいったら何百人にもなったでしょう。

県央部から来てくれた人の中には、かつて宮古に勤務した人も多かったです。「どうしても助けに来たかった、手伝いたい」と言ってくれました。市町村立学校の先生たちは、全県交流人事をしているので、宮古にいた人もいるのです。人事権の最終決定権は県教委が持っているため、宮古のことを知らない先生が赴任してくることも多いです。

震災は、人事異動の時期だったので、内示がすでに終わっていました。しかし、人事異動をすると、子どもたちに大きな負担がかかってしまうので、県教委の方針で被災地は人事異動が1年凍結になりました。異動予定の先生たちには気の毒でしたが、私たち行政にとってはありがたかったです。

先生たちが変わらなかったから、生徒たちは1年同じ状況で学校に来られました。もし人事異動があれば、学校が閉まっているうちに先生たちがいなくなっているという状況になったわけです。それは、子どもたちにしてみれば大変不幸なことになることでした。

(4) 学校が避難所になるということ

学校が避難所になっている場合は、部屋の割り振りや支援物資の配布などは、学校長と市から来た職員で管理をしました。最終的に避難所対応は、運営は市でというのが建前でしたが、手伝いなどは学校職員でした。地震直後は先生たちだけだったのですが、市の職員がシフトを組んでいけるようになってから、3月20日くらいからは、市の職員が管理するようになりました。

年度末・年度始めのいろんな処理をしなければならないのに、なかなか先生たちは自分の仕事に手をつける事ができませんでした。避難所の用務が先生たちの手を離れたのは、4月に入ってからでした。鍬小や二中では、市の職員で仕事の関係や被災したなどの理由で、たまたま避難していた人がそこに張り付いて管理することになるなど、学校によって状況は様々でした。

校舎を避難所に使う場合、どこを使うかはまずは校長の判断です。でも、子どもたちの活動が優先なので、授業に支障がないところは貸すけれども、そうでないところは断る。3月の最初の時は、寒かったし、暖房もないので、体育館では寒くて気の毒だということで、もっと暖が取れる教室を開放した学校もありました。でも、4月に入ってだんだん新年度の準備をしなければならないので、「すみません。こういうわけで教室を開けて体育館に移ってください」と言って、不承不承でも体育館の方に移ってもらいました。

そういう風にして、避難した方と校舎管理をしている学校長が話し合いをして、貸す場所というか住む場所を決めていました。住民もまず地区の方々がほとんどですし、子どもたちがその学校に世話になったという人がほとんどだから、無理なことは言わないはずです。

(5) 学校を利用した仮設住宅について

学校への仮設住宅建設は、大変難しかったです。しかし、愛宕小は仕方がありませんでした。次の年に統合・閉校が決まっていたので「校長先生ごめん、こんなに地区も被災したから校庭を」、ということで、お願いしました。愛宕に子どもたちがいるのはあと1年しかないので気の毒でした。

仮設住宅のための場所がほしいという話は、二中にも来ました。中学校は部活もあるし大変難しい。二中はどうにかならないかと話して、バスで5分のところに仮設のグラウンドを先に作ってもらって、そこに授業で行くためのバスも手配して、それからバス要員の先生も1人宮古市で雇って、それから二中に仮設を建ててもらいました。

鍬小は、校庭の3分の2は子どもが使うようにするのでということで、地区のためだから、と校長先生も認めました。その状況で運動会もできました。

重茂は、いくら探しても土地が重茂小学校にしかないのです。それで重茂小学校の校長に、重茂地区全体のために貸してくれとお願いしました。2年経ってから、土地の所有者にお願いして、学校の近くに仮設の外遊び場を作りました。

田老三小は、プールの脇なら全く授業に差しさわりがないということで、6棟仮設を建てました。

赤前小は、校長先生が最初に、震災から1週間くらいで、仮設の設営をOKしてくれました。被災した地区なので、子どもたちも大切だが、「地区のために許可します」と言っていました。「大丈夫か」と聞いたら、「体育もそれなりにできますから」ということで、全面に仮設を建てました。でも、1年経ってから、近隣に結構広い仮設のグラウンドを建てました。

一番大変だったのは、赤前小だったけれども、それも1年を経て、運動会ができるくらいの広さの仮設のグラウンドを作ったので、不便はかけるが、他の市町村に比べればいいのかなあと思います。私が教育長をやめてからも市長さんは、学校から先に仮設を撤去する方針だったので、それはいいことだなと思いました。(＊仮設住宅用地提供の)話は、校長と教育長の間で相談しました。本庁側からすれば、早く仮設を建てたかったのです。

退職して無職になって街を歩いてみて、子どもたちに公園がないのは気の毒だと思いました。子どものある親御さんは、公園で子どもを遊ばせたいだろうな、小学生には思いっきり遊べる校庭・公園が欲しいよなと思いました。

佐々木先生は、教育長を平成22年4月1日から平成25年8月まで勤めた。当時の事を振り返り、インタビューの最後をこう締めくくった。「辞めてしまったら、あの時の記憶が全て飛んでしまったような気がす

る。よそ見をする暇もなかったのかな」、と。

C　子どもの生活を取り戻すために

次は、避難所生活には、どのような問題があり、それをどのように解決していったのか、その過程を母親たちからの聞き書きから明らかにする。

1　避難所を出て転々とする

A9で紹介した田老の**花輪さん**は、翌日になって線路を歩いて北高校にできた避難所に行った。ここではその後の生活について記しておく。

北高校から樫内、そして街中へ

その後、樫内にいる親戚の家で1週間ほどお世話になりました。薪ストーブのある大きな家で、布団もろうそくもありましたが、停電でまだお風呂に入ることはできませんでした。

その頃になると、宮古市街地の方では電気が復旧しました。叔母が「電気が通いお風呂にも入れるから」と誘ってくれたので、それから1か月ほど滞在しました。1週間ぶりにお風呂に入ることができました。でも、親戚とはいえ気兼ねもありました。また、避難生活を続けるうちに、子どもたちが次々に風邪をひき始めました。車も流されてしまったので、病院に連れて行くのにも困りました。

別の街に住む母がお金を持って来てくれたので、そのお金を持って薬王堂に子どもたちの物を買いに行きました。長蛇の列ができていました。どこから来たのかと聞かれたので、「田老から来た」と言ったら、前の方に並べるように店員さんを説得してくれました。

その後、3週間ほど夫の実家に行きました。まだ電気も水道も復旧していませんでした。そうこうしているうちに、仮設住宅ができて移ることができました。一番上の子がまだ幼稚園の時は、夫の仕事の関係で盛岡の幼稚園に通っていたのですが、その頃の友達が物資をたくさん送ってくれました。

少ないもので暮らす

仮設住宅は収納力が低く、片付かないことが一時情報番組などで盛んに取りざたされていたが、花輪さんのご自宅（仮設住宅）は、大家族にもかかわらず、驚くほど物が少なくすっきりとしていた。

「田老の人は近所付き合いが密なんです。何かもらったら必ずおすそ分けをするし、もらったらあげる。物をもらってもらいっぱなしの人はいない。たくさんいろんな方にいただいたし、いただいた物を分け合ったりしたので、物はなくても何とかなりました。家族の命さえあれば、あまり困ることはなかった。物はなるべく増やさないようにしています。家族がいれば大丈夫」と話していた。

2　グリーンピアでの避難所生活

同じく、**前田恵美さん**の事例から、グリーンピアでの避難所生活についても記しておこう。

グリーンピアの避難所での生活

夫は漁協に勤めているのですが、直後の3、4日は、消防団として捜索作業に出ていました。内陸にいる弟が探しに来てくれたので、消防団の活動で残る夫と、役場に残って水汲みのボランティアをするという中学生の子を残して、5人の子を連れて実家に避難しました。途中、下の子たちを連れて宮古商業高校に避難していた長男を迎えに行きました。実家には、2週間ほど滞在しました。しかし、夫たちとの連絡が取りづらいため、グリーンピアの避難所に移動しました。

最初の3、4日はグリーンピアのホテルの廊下で過ごしました。布団を人数分借りて、廊下に並べて生活したのです。赤沼正清さんがリーダーになって、掃除係などを割り振りました。私はトイレ掃除をしました。朝のラジオ体操のほか、時間割りも決まっていました。避難所の消灯時間は9時でした。食事は配給でしたが、最初の2日くらいは食べられませんでした。

その後アリーナに移って3、4日経った頃、小さな子どもがいる人やお年寄りが、優先的にグリーンピアのホテルの部屋を借りられること

になったので、2か月ほど仮設住宅ができるまでそこに滞在しました。

アリーナ4日目くらいから女性のリーダーが提言して、女性が着替えたり洗濯物を干す場所ができました。汚れた衣服は、最初は手で洗濯して、池の周りの木に干したり、木で物干し台を作ったりしましたが、そのうちプールに洗濯機が5、6台置かれました。使用時間が決まっていたため、朝の4時くらいから洗濯の順番待ちをしました。

子どもの様子

アリーナにいる頃から子どもたちの生活が荒れてきました。阪神淡路の時も学校が荒れたと聞きました。ひどい災害が起こって、良いも悪いもなくなってしまったのではないかと思います。

グリーンピアにはボランティアもたくさん来てくれました。ＡＫＢや渡辺謙さんも来てくれて、子どもたちは楽しんでいました。

プールの脇に自衛隊が来て、グリーンピアではごはんを炊いてくれました。交流はあまりなかったのですが、長男が自衛隊に入ったのは、震災の時自衛隊に助けてもらったことがきっかけでした。中学生の子は、津波を見ていました。子どもたちの作文を読むと、大人より田老の役に立ちたいと真剣に考えていることがわかります。

学校は、4月の下旬になって再開しました。中学校は被災したので、小学校の3階に夏まで間借りしての再開でした。田老の給食センターは残ったので、割合と早く給食が再開しました。高校の方は、学校か県でしばらくは昼食を用意してくれました。

3　浄土ヶ浜パークホテルで

Ａ4で紹介した、日立浜の村木めぐみさんの一家は、その後、どうしたのだろうか。**村木さん**の話に戻ろう。

浄土ヶ浜パークホテルに行く

浄土ヶ浜パークホテルは、町内の人以外の人でごった返していました。客室にはお客さんが泊まっているので、ロビーのじゅうたんの上に畳を敷いて1人ずつに布団をくれました。自家発電機で自販機やテレビも動いていました。そこには田老の人も、水産業の仕事で来ていた中国人も10人は避難していました。（＊パークホテルでは）みんなを受け入れていたのですが、避難所に指定されていないので、食料や水や重油をどうするかということになりました。母は、日立浜で民生委員をしていたので、ホテルの支配人と相談して、行政連絡委員の方と2人で、市役所にお願いに行くことになりました。

食事・トイレ・お風呂・洗濯・ガソリンが手に入らない

次の日、自衛隊が水と重油などを持って来てくれ、宮古市からは、おにぎりが届けられました。でも、硬くて食べられませんでした。パークホテルの方で、避難している女性や子どもたち、そして従業員の方々が流れ作業でおにぎりを作ってくれました。また、バンケットルームを開放して、そこを食堂にして、スープなども出してくれました。不公平が出たり、食事の時に混乱したりしないように、ホテルの方で、ナンバープレートを渡して、番号と名前のリストをつくり、チェックするようになりました。

食器はみんなで洗いました。水は出ていました。トイレの水が流れなくなったので、男の人たちがお風呂の水をバケツリレーで運んで流しました。

お風呂は大変でした。ライフラインが復旧するまでは、車がある人は銭湯に行きました。何かを買いに行くにも長蛇の列でした。市外から商品が来ないからみんな困りました。とりわけ、ガソリンを手に入れるのが大変でした。長時間並んでいても、「今日はここで終わり」と断られることもあったんです。ライフラインが復旧しても3月中はガソリンが手に入らず、動きがとれませんでした。

なんで私たちだけが？

パークホテルでは、子どもたちにアトピーやぜんそくの症状が出ました。薬はあったのですがもっと強い薬でないと症状が治まらない。夫の親戚が太田にいて、「お風呂や洗濯においで」と言ってもらったの

で、その日から2、3日おきに借りに行きました。

被災地とそうでないところの差は大きいです。被災していない人は普通の生活をしていました。大人でも「なんで私たちだけが？」という思いがありました。それでも、お風呂や洗濯をすると人間らしい気持ちになりました。

でも、パークホテルに戻る際には、「今から現実に戻るぞ！」と自分に言い聞かせました。正直、子どもたちの方が強い。子どもたちは不便な避難所生活も楽しんでいました。

いろいろな団体がボランティアで活動してくれました。お医者が来てくれたのが一番助かりました。子どもたちに薬をもらえました。

避難所で困ったことは、ホテルの支配人と民生委員である母との2人が中心となって解決していました。一人ひとりが置かれている状況は様々です。家が無事でもライフラインがないので避難所にいる人もいました。

協力して子守り

避難所では、子どもを持った親同士で、子どもの世話をしあいました。被災後、（＊私に）何もする気が起きない時期があって、下の子がわがままになりました。小学生のお姉さんたちに下の子を見てもらったり、ひとりのお母さんが、「休んでて、みんなで預かるから」と一人になる時間を作ってくれたりしました。

その仲間とは、今でもつながっています。避難所生活で仲良くなったのです。数か月の赤ちゃんを持つ人から高校生のお母さんまでいましたが、同じ小学校の人を中心につながりました。いろんな状況の人がいて親同士、子ども同士協力し合ったのです。

シーアリーナ（宮古市民総合体育館）の避難所へ移動する

1か月したら、市の方から、パークホテルが工事関係者を受け入れるので、出て欲しいと言われました。市長が説明に来て、市内の避難所を小山田のシーアリーナに統合したいということでした。ちょうど仮設住宅の申し込みがはじまった頃のことです。

小山田に移る頃、子どもの体調が思わしくなかったので、大田にある親戚の空き家を借りて、毎日のように避難所に通うことにしました。4月から上の子はバスケのチームに誘われて行くことになりました。

勉強スペースを作ってもらう

アリーナにはいろんな人たちがいました。京都から来ている警察の人は、子どもたちを毎朝送りだしてくれて、毎夕迎えてくれました。また、子どもたちが勉強するところがなかったので、警察の人が廊下にテーブルを置いて勉強場を作ってくれました。壁に「めざせ！警官！勉強しないとなれないぞ」という手書きのポスターが貼られていましたが、遅くまで気にせずに勉強ができたし、勉強も楽しくできました。京都の警察の人たちはコミュニケーション能力が高い方々でした。また、夜勤に出なければならない人の子は、みんなで見守りました。困ったことがあると、母に伝えて、母が解決に動きました。

仕事再開

仕事は6月から再開しました。水産加工会社の中では早い方でした。仕事が忙しくなってきたのですが、アリーナで何かイベントや炊き出しがあると教えてくれました。美容師さんが来て、子どもの髪をカットしてもらいました。それから、盛岡の仕出し屋のしもやさんのお食事が届くようになりました。ドラの組合員は、店にリクエストすることができるので、「ドラさんの方がいい」と言う人もありました。

避難所で息子は、ごはんを食べさせてもらうなど、面倒をみてもらっていました。子どもたちと自分は、いつもアリーナに寄って家に帰りました。

ミニバスケとユニフォーム

小学校のミニバスケは5月末に再開しました。宮古小学校を拠点にやっていたチームだったのですが、震災で一時的に田代に移ったので、

送り迎えが大変でした。コーチは学校の先生でした。だんだん普通に内陸への遠征も始まりました。被災した子は、避難所に帰るので、その違いはあるだろうなという思いがありました。

ミニバスケのユニフォームは津波の水に浸かってしまいました。最初、ユニセフに電話をしてユニフォームを支援してもらえないかと話したら、前例がないと言われたのですが、ケアジャパンを紹介してくれました。審査が通り、新しいユニフォームができました。

学校にもたくさん支援物資やサービスが来ました。ジャージや制服も支援してもらいました。海外からの支援はカラフルで喜んでいました。支援は最初は被災者だけでしたが、最終的には被災していない子にも、全校生徒にわたりました。支援をしてもらうということを体験できたのは良かったです。

外練習ができない

宮古への支援の多くは田老へ行きました。数年たって話題になった時、「鍬ヶ崎は忘れられているようで寂しい」と母が言っていました。上の子の学年は2クラスでしたが、以降は全学年が1クラスになりました。昔は学校が地域の中心でしたが、今は地域の人も少なくなり、地域の人みんなが子どもをみてくれるということはなくなりました。通学路は工事の人も水をまいたりしているのですが、土埃で咳き込むのでマスクをするようになりました。

中学生は部活でも危険なので走れません。走らないようにと要請がありました。部活の外練ができないんです。震災以降、行動が制限されることが多くなって、体を使うことが少なくなりました。でも、子どもにはいろいろとチャレンジさせたいのですが、規制する親たちが増えてきました。私と友人は、夕方、45号線沿いを浄土ヶ浜から佐原3丁目まで、息子たちを共に走らせました。内陸の子と体力の差がつかないように気を付けていました。

瓦礫の街を見せる

上の子には、被災後、瓦礫を片づける前に現状を見せておきたかった。子どもにはみせたくないという人もいましたが、生まれ育った町で何が起きてどうなったかを見ておいてほしいと思いました。日立浜の実家や住んでいたアパート、鍬ヶ崎の町を見せました。「この景色を覚えていて、あなたの子どもに話して聞かせてね」と話しました。息子は「わかった」と言いました。

4　スクールバス問題を巡って

子どもの生活を取り戻そうと奮闘する村木めぐみさんの話の中で、特に力が込められていたのが、スクールバス問題である。震災の1か月後、市からパークホテルにできた避難所からアリーナへ移動を要請された際に、移動を受け入れた決め手となったのが鍬ヶ崎小学校までスクールバスを市の方で手配してくれるということだった。だが、それを実現してもらうには、かなりの努力と様々な人の力添えが必要だった。

市では、子どもたちの学校までバスを出してくれるということだったのですが、バスはフィッシングセンターまでしか行きませんでした。そこから学校までのかなりの距離を、小学生に、全く片付いてない瓦礫の中を歩いて行けということでした。それは、危険だし、話が違う。また、アリーナには、小学生に加え、中学生が3人いましたが、アリーナから二中までもバスが出ないということでした。

避難所生活の中、毎日親が送り迎えすることは困難であった。ましてや、転校させることは子どもへの負担が大きすぎる。何度もアリーナを訪れていた市長にこうした状況を直談判することも叶わず、途方に暮れる親子たちに、やがて救いの手が差し伸べられた。子どもたちの窮状を看過できない大人たちが現れたのだ。

みんなで通学の足についての対応を考えました。知り合いにいわて生協の理事がいて、その人がドラの店長に相談してくれました。

こうして店長が2人交代で、小中学生のスケジュールに合わせて、

送迎をしてくれることになりました。車は7、8人乗りのワンボックスカーを無料で貸してくれる人がいました。

鍬小に通う小学生は5人、中学生は3人いましたが、店長たちはそれぞれ別に送り迎えしてくれて、中学生の部活の朝練にも対応してくれました。毎日朝晩2往復。風邪をひいて乗らない場合は連絡をしました。

そのうち、これは教育委員会に言うべきだということになりました。でも、私たちのようなおばさんが行っても相手にしてくれないと思われました。そこで、市会議員さんに頼むことになりました。

結局、議員さん2名と、いわて生協の理事さんとユニセフ担当の人、ドラの店長、親3名の総勢8名で教育委員会に行きました。教育委員会の方は、4月だったので、子ども一人一人の事情はわからないようでした。その様子を見て議員さんが、「何をやっている！被災地に行け！」と怒っていました。

後日、ジャンボタクシーで小中学生の時間を合わせてアリーナまで送迎をしてくれることになりました。これまで送り迎えをしてくださったお礼に行くと、ドラの店長さんは、「困っている人がいれば、当然のことだ」と言われました。

元ドラ店長・**菅原紀夫さん**（昭和36年生）は、次のように話している（取材日：２０１５年6月29日）。

アリーナの避難所には、震災直後から鍬ヶ崎から来ている人が結構いました。鍬ヶ崎小学校にも愛宕の避難所にも入れなかった人たちでした。その中に第二中学校に通う中学生が3人、鍬ヶ崎小学生が4、5人いました。

ドラの北側は6㍍も冠水しましたが、店に被害はなかったので、震災の翌日から店頭で販売を始めました。3日目には電気がつき、営業を本格的に開始したら、2千人を超える数のお客さんが開店前から並びました。

そんな中、個人的にお母さんたちにスクールバスの事を相談されました。震災で子どもの命は助けた。今、アリーナの避難所にいるが、元の学校に通わせたい。だが、アリーナは小山田学区なので学区を越えて登校させるのは無理だと言われたということでした。

いわて生協に期待したのですが、責任問題になるということでした。でも、子どもは前と同じ学校に通いたいのだ。「自分でやればいいんだろ。自分で責任とればいい」という気持ちになりました。

そこで、葬祭会館のマネージャーを誘って2人で、朝晩、子どもたちの送り迎えをすることにしたのです。

中学生は中総体前だったので、5月中旬まで、朝は7時半までに行かねばなりませんでした。それでは小学生には早すぎる。帰りは小学校3時、中学校5時半に時間を決めて行くことになりました。校門のところに警備の人が立っていたので、私たちが来ることを、お母さんたちが学校の先生に伝えてくれていたので、助かりました。

子どもたちは当初、車内で何もしゃべらなかったのですが、送り迎えが終わる頃には明るくなっていました。子どもたちの立ち直りは早かった。

その間、お母さんたちに頼まれて市教委へも交渉に行くことになりました。私たちが送迎をするようにしたら、1週間くらいで教育委員会だか市だかが動いたので、もう必要がなくなった、とお母さんたちがお礼に来てくれました。

5　瓦礫の中の自宅で暮らす

鍬ヶ崎に住むBさん（昭和46年生）には、震災当時小学生と幼稚園児の子どもがいた。被災後、盛岡に転居する話も出たが、子どもたちが転校を嫌がったため、被災後の瓦礫の町と化した鍬ヶ崎の自宅にとどまり、学校に通わせたという。当時の鍬ヶ崎地区の状況を聞いた（取材日：２０１５年3月7日）。

両親に留守番を頼んで、車で家族旅行に出かけており、ちょうど宮古に帰る日に震災が起きました。夜に、両親が津波で行方不明になり、捜索中であることを、宮古在住の叔母から電話で聞きました。翌日の

夜には、遺体で見つかったと聞いたのですが、高速も一般道も封鎖されていたため身動きが取れず、なんとか14日の夜になって盛岡に入り、ようやく宮古に戻ることができました。

鍬小の先生たちが私たちと連絡が取れずに心配していたので、宮古に戻ってから小学校に行きました。鍬ヶ崎の町には入れなかったので、上の道を通って小学校まで行きました。学校で通信簿や学校の連絡先などが入った封筒をもらいました。学校はしばらくお休みになりました。宮古ではまだ水道が出なかったので、盛岡に単身赴任している夫のところに持てるものを持って行くことになりました。盛岡にはライフラインが生きていたのです。

ガソリンが入れられるようになってから、何度か家の片付けに来ました。鍬ヶ崎の自宅は、震災の5年前に新築したばかりでした。道ができて家を直せるならと思い、子どもたちを兄の家に預けて家を見に来ました。家は見えたのですが、周りが瓦礫で中に入れず車から見ました。2階まで水が入り天井は落ちていました。後に、羽織るものと貴重品を最優先で回収しました。子どものランドセルは津波のあとも2階の机の上にありました。

瓦礫が端に寄せられてから、子どもたちを連れて来ました。みんな静かで、何も言えないようでした。事実は知らなければならない。映像を見ていても理解はできない。でも、大人でも難しい。両親の火葬に立ち会わせたことも良かったのか自問しました。

4月末まで盛岡に暮らして、日帰りで鍬ヶ崎に来ていました。家を建てた岩泉の工務店に直す方向で家を見てもらい、材料を何とか手に入れて2階の1部屋を何とか住めるようにリフォームしました。毎週、金曜日に盛岡に帰り、月曜日の朝早くにこちらに来ました。

学校がある日は鍬ヶ崎で過ごしたのですが、玄関がないし怖かったです。当時、留守宅を狙って泥棒が来ていました。物騒なので、カギをかけてもらいました。隣の家の人も、震災で亡くなったのですが、被災した家に残された箪笥の引き出しが全部開いていました。泥棒の仕業です。背筋が凍りました。電気はまだつかないので、夜はランタンの明かりで過ごしました。震災直後は真っ暗で物騒で不安でした。そんな中、大阪から来た警察の方が夜2回見回りに来てくれました。

途中で電気をつないでくれたので、盛岡でレンジを買って持って来ました。宮古に買い物に行っても物がないんです。お惣菜なんてない。ずっとカップラーメンばかり食べていました。しばらくして、本当に結構経ってから、届け出をすれば、お弁当を配ってくれることを知りました。平日の夕方、避難所のある小学校に行くと、夕飯と朝食をもらえました。2週間くらいそうやって食事をいただきました。

家を直して、6月には下の階に和室もでき、仏さまも安置できました。7月になって、ようやく最小限住めるようにはなりました。

子どもは、周りが暗くて怖かったのではないかと思います。上の子はしっかりしている風でした。下の子は、まだ理解できない年頃だったので、夜部屋で「おじいちゃんおばあちゃんもう来ないの？」と聞いていました。宮古では先生が子どものケアをしてくれました。下の子は幼稚園に通っていました。園は千徳駅の方なので無事でした。小学校より先に保育を再開していましたが、学校にあわせて登園することにして、車で送迎しました。

月日が経って一層悲しみが募ります。下の子が小1の時に胸が痛いと保健室に行きました。おばあちゃん子だったので、気持ち的なことだろうかということでした。雰囲気が似た人を見ると先生に「僕のおじいちゃんおばあちゃん亡くなったの」と話したと聞きました。先生たちがケアしてくれました。今は言わなくなりました。先生の中にも家を流された人がいるのに、学校でみんなのケアをしてくれたのです。

防災用品については、震災前は、懐中電灯くらいは用意していました。震災後は、水、乾パン、アルファ米などを買っています。この間津波注意報が出たので、1日分の着替えや乾パンは車に乗せたままにしています。避難する時は、車で上がって中里に住む兄のところに行きます。揺れたらすぐに逃げることにしています。

6　津軽石での避難所生活

先に紹介した保育所の所長の証言の中に「7時過ぎには、炊き出しのおにぎりをいただいた。温かいおにぎりで、みんな喜んだ。」（A2）とあったように、津軽石ではすぐに炊き出しが行われた。

相当な被害を受けたのになぜ、津軽石では当日の夜に炊き出しができていたのか、その仕組みについて明らかにしておこう。

温かいおにぎりの炊き出し

津軽石小学校に避難した保育所の先生たちは次のように話していた。

津軽石では「婦人防災委員」の人が、昔の学校の給食室を使って炊き出しを行っており、温かいおにぎりなどをいただきました。

最初は地域の人がわかめやお米を持ち寄ったようです。お米を出した人は自分たちが食べるものがなくなって困ったと聞きました。

炊き出しの訓練ができていた

津軽石の**中島ムツ子さん**は、兄と共に甥の子どもを保育園に迎えに行き、地域の人とともに小学校の裏山に避難していた。そのあとの炊き出しの様子を、以下のように語っている。

裏山から小学校に降りてくると、女の人たちはすぐに津波に遭わなかった家を回ってお米をもらって歩き、集めたお米でおにぎりを作りました。津軽石では、毎年の避難訓練の時に訓練をしているし、震災前は小学校の運動会の時もおにぎりの炊き出しをしていたので、常に訓練ができていたのです。炊き出しをすることは、口伝えで情報が回ってきます。それは昔からのことで、そうした体制ができているのですぐに食材が調達されます。

震災の時は、小学校の給食室を使いました。ずっと使われていなかったのですが、設備を残しておいたのです。今回は、自衛隊を定年した盛合さんがリーダー役を引き受けてくれて、地区のお母さんたちが手伝いました。盛合さんは最後の日までいて、1日中食事を作ってくれました。キノコを調達して来てくれたこともありました。サラダも1人分ずつトレイに乗せてくれて、ごはんと味噌汁とおかずを作って、いつも温かい食事を出してくれました。仕事に行く人には、お弁当のおにぎりまで持たせてくれたのです。

だから、何も持って逃げなくても、物資がなくて困ることもありませんでした。農家の人が出した大きな米袋が並ぶほどで、体育館のステージはすぐに支援物資であふれました。店が商品を全部持ってきて寄付してくれたり、赤前の冷蔵庫の魚をもらったりもしました。

2日目、一番先に来たのはJRからの支援でした。家を失った人から順に受け取りました。大きい避難所にはすぐに支援物資が届いたんです。グラウンドではドラム缶で火を焚いてあったし、人がいるところには看護師も医師も介護士もいました。しばらくすると、いろんな大学の巡回医療が来て助かりました。

7　震災が子どもに与えた影響と心のケアについて

(1)　津波ごっこ　体育館に入れない　津波映像でパニック

伊藤直子さん（昭和43年生）は、あの日、2歳のお子さんを赤前の実家に預けて仕事に出ていた。職場から様子を見に行った時のことを話してくれた（取材日：2015年3月6日）。

自宅は藤の川なので被害はありませんでした。震災時2歳の子どもは赤前の父母が、毛布をもって車で高台に連れて逃げてくれました。子どもは黙ってよく言うことを聞いたそうです。携帯がつながらず実家と連絡が取れませんでした。職場（社会福祉協議会）にいて、2晩仕事で帰れなかったのですが、課長が「とにかく帰りなさい」と言ってくれました。

長沢から津軽石の方を通って行きましたが、道がなく、山道で迷ってしまいました。ようやくたどり着いた赤前の町は、変わってしまってどこがどこだかわかりませんでした。

なんとかたどり着いた赤前小学校の体育館の扉を開けたら、お年寄りの真ん中で小さな息子が踊っていました。無事を確認して、すぐにまた仕事に戻りました。

宿泊当番の時は、子どもを仕事場に連れてきて一緒に泊まりました。3月いっぱいは職場と避難所を行ったり来たりしました。水は近くの

人が持って来てくれました。食事は、1つの即席ラーメンを子どもと2人で食べました。電気がないので、7時くらいに「眠る時間」と言ったら、素直に寝てくれました。

避難所ではオムツを替えるのが一番困りました。大便はトイレの隅っこで替えました。1週間後、水が復旧してようやくお風呂に入ることができました。ガスは震災後も使えました。

震災前には、自宅には何も災害の準備はありませんでした。赤前の母は、防災セットの入ったリュックと、毛布とオムツ1袋を準備して持って逃げてくれました。だから、震災後はそれらと水やお米も必ずストックするようにしています。

震災後、子どもの遊びが変わりました。組み立ててはなぎ倒し、ブロックで津波を再現するようになったのです。ホワイトボードにおにぎりや車の絵をかいては絵をワーッと消す。「海に食べられた」と言っていました。また、テレビで津波のシーンを見るとパニックになりました。その後も体育館のような場所に入れませんでした。避難所を思い出すからです。地震発生後3、4日してようやく避難所に迎えに行くことができましたが、母親としてどうだったのか。仕事を優先してしまったことを、つい考えてしまいます。

(2) 抱っこの必要性について

震災時、鍬ヶ崎学童の家に務めていた**田畑輝彦先生**は、千徳学童の家に移動となり館長をされている。震災後、子どもたちに見受けられた様子について、次のように話してくれた。

津波の後は、学童の家にあったおやつ1週間分やおもちゃを持って避難所に行き、遊びをしました。避難所には勉強する場所がなかったので、学童の家の子以外にも開放しました。畳の部屋はお年寄りに使ってもらいました。被害にあわなかった子たちは避難所には来ませんでした。

宮古の学童の家は、シルバー人材センターでやっています。津波のあとは、働く人が増えたし、1人でいたくない子どもも多くなったため、利用が増えました。

子どもたちを安心させるためには、声掛けが大事だと思います。「元気？」とか「そのリボンかわいいね」とか。抱っこしたり、孫をかわいがるようなものです。

海辺の地区で津波を見たり、肉親を亡くしたりした1年生の子が引っ越して来て、4月から千徳学童の家に来るようになりました。おじいちゃんと犬を津波で亡くしたそうです。表情もなく、ご飯も食べられない状態で、お絵かきをさせてもミミズのような絵でした。

その子を1週間、ずっと抱っこして過ごしました。そのうちに、ちろっと友達と遊んで、また抱っこに来るようになりました。まさに学童の家の孫です。チョコレートを上げたりもしました。

仮設住宅ができて、千徳学童の家にも子どもが増えましたが、あんなに心が傷ついた子はいない。津波の危険は認識していましたが、始めて津波の怖さを自覚しました。

千徳に行ったばかりの頃は、子どもたちの間で積み木を組み立ててザーと倒す遊びや、サイレンの音のモノマネ、「宮古市は必ず復興します！」という市長さんの真似が流行っていました。

震災後3か月くらいは、サイレンを聞くと震災を思い出し、大人でもドキッとしました。

(3) 津波ごっこ・地震ごっこ

震災後、子どもたちの津波ごっこは、一時テレビなどでも話題になった。こうした子どもの遊びの変化については、保育園の先生方からも聞いている。

赤前保育園の鈴木先生によると、震災後の子どもの様子がどことなく乱暴になったという。また、津波ごっこ、地震ごっこ、無線や津波警報の放送の真似などの遊びをするようになった。

それを見た保育士たちは、「不安になって、やめさせようとしましたが、ユニセフの方から、そうやって子どもたちは、震災によるストレスを発散しているのだとアドバイスを受け、構えずに見られるように

なりました。大人が不安な時、子どもたちは落ち着いていたので、その反動が後から来るということでした」と、話している。

⑷　大切な時期に遊べていない

石崎公子先生（昭和27年生　取材日：２０１５年）は、育児相談、家族支援などを歴任し、40年保育所に勤務した経歴を持つ保育の専門家である。震災後、千徳保育所に赴任した。

「3・11を経験した子どもたちが、今、学校で落ち着きがないという評価を得ています。それは当然のことです。大事な時に遊べていないのだから。この年代の子ども全体をとらえて長期的な教育をしないといけない」と、石崎先生は言う。

子どもの心と身体の成長にとって、思いっきり体を動かして遊ぶことは重要である。先生は震災で十分に遊ぶことができなかったことの及ぼす影響を懸念した。

こうしたこともあり、千徳保育所では、被災した津軽石保育所の園児や先生たちに保育の場を開放した。遊び場の提供が必要だと感じたからだ。石崎先生は、次のように話している。

1日だけ、短時間であっても、津軽石保育所の子どもたちに通常の保育を経験させてあげたかった。

マニュアル通りにしていては対応できなかったんです。千徳保育所までは距離があるので、役所のマイクロバスで職員と子どもたちを集め、職員にはマスクを外して保育をするように指示しました。子どもたちはのびのびと走り回っていました。

また、震災から必死に子どもたちを守った保育士の先生たちに対する心のケアの必要性についても次のように指摘している。

保育士たちの慰安でバス旅行をした時、合唱を聞きに行ったのですが、涙が出ました。心のケアがどれだけ必要かがわかりました。被災後、楽しいこと、イベントの必要を感じました。

⑸　スクールカウンセラーによるケア

現在の学校における心のケアに関しては、現・高浜小学校校長の**中村登志江先生**は次のように話している。

普段カウンセリングしたり、常に状況に気を付けて、それに基づいた声かけをしています。児童全員が対象です。月2回はスクールカウンセラーが学校に来て、学年ごとに全員カウンセリングしたり、気になる子をみてもらったりしています。また、担任も学期に1回、個人面談を受けています。

それとは別に、宮古市全体で、お母さんを亡くした子もいるので、巡回のスクールカウンセラーに来ていただいて、教育センター、県の心のサポート事業で年1回アンケートをしています。心配な子にはケアカウンセラーが悩みを聞いてくれます。このアンケートからは、専門家が見れば反応が出ているのがわかるのです。

さらに、今、心のケアの授業をしています。子どもから話を聞いて、「それはこういうことなんだよ」と返してあげるような授業を定期的にやっています。

D　避難体制の確立と防災教育の大切さ

1　小さな子に向けて

⑴　しつけとしての防災教育（家庭において）

宮古の人々の間には、過去の記憶が個々の家庭で語られ、しつけとして伝承されている。それが実際の避難につながり、多くのいのちを救っている。ここでは、その具体的な事例を2例紹介する。

①　津軽石で

津軽石の中島要一さん・ムツ子さんご兄妹は、薬や電池、アメや水、使い捨てカイロなどが入った非常持ち出しリュックを、いつでも身近に置いている。また、孫の母親には、つねに毛布と水とおむつを車に入れておくように言っている。

お二人は、子どもの頃にチリ津波を経験したので、地震があったらすぐに何も持たずに小学校の上にある畑に逃げることにしている。「時間がかかっても必ず迎えにいくから」と、小さい時から教えられてい

たからだ。お二人の父親は消防団員で、明治の津波で田老が甚大な被害を受けた時に、津軽石から復興の手伝いに通った経験があった。そのため、家ではどんな小さな地震でもすぐに逃げることにしていたという。

そして、今度は幼い孫にも、「いつも、何かあったら家から出て叫びなさい。お向かいのおばさんに、『○○ちゃんです。一緒に連れて逃げてください』と言って、まずは学校に逃げなさいと、折に触れて話して、時々練習させています。また、絶対に1人で行動してはいけないとも言いつけています」とのことであった。

② 田老で

田老の**花輪香代子さん**は、以下のように話す。

震災前には特に災害への備えはしていませんでした。「大きな地震が来れば、赤沼山に逃げろ、身一つで逃げろ、避難する時には車も使っちゃダメだ」、と小さい時から親に言われていたので、非常持ち出しについては考えていなかったです。

赤沼山は、自宅のすぐ目の前にあるし、何かあったら身一つですぐ山に逃げればいいという感覚でした。小学生の子どもたちにも「もしもの時は赤沼山だよ」と言い聞かせてあったので、そのことをよくわかっていました。

(2) 園児や生徒に実際の経験を伝える

一方、実際にチリ地震の際の津波を体験しており、それを園児や生徒に伝えている先生たちも少なくない。

震災時に高浜小学校長だった大洞晴洋先生は、昭和35年のチリ地震津波の時に小学生で、津波を見に宮古橋まで行ったという。

また、宮古保育園では、毎月の避難訓練とその後の「津波のお話し」に力を入れているが、園長自身の体験が、防災教育のベースにあると言う。

チリ地震の際の津波を覚えています。海岸近くにいたら、5時頃にパトカーが津波が来ると放送していました。家に戻って父母に伝えると、「地震がないのに津波が来るわけない」とえらく怒られましたが、山に逃げたんです。

上から見ていると、川から水が来て、逃げる人を飲み込む様子は、獲物を取るようでした。また、子どもの頃、おばあさんたちから昭和8年の津波の経験を聞きました。アイオン、キャサリン台風時の市内の被害も覚えています。今、保育園では、子どもたちに「お父さんお母さんに逃げるように言いなさい」、と伝えています。

(3) 避難訓練

防災教育の要は、避難訓練である。実際、地震発生と同時に、多くの幼い子どもたちが瞬時に退避姿勢を取っている。無事に避難できたのは、訓練の賜物であった。そけい幼稚園の理事長と園長が言うように、「子どもたちには、言葉で理屈を説明するよりも、身体で覚えさせるのが何より大事」なのである。

具体的にどのような訓練が行われているのだろうか。

避難訓練と津波のおはなし「津波が来たらどうするの？」

宮古保育園では、毎月1回避難訓練をしている。地震・津波、火災、洪水など、月ごとの訓練である。**鈴木哲夫園長**には、訓練の様子を説明してもらった。

まず非常ベルを鳴らし、〝訓練　○○発生だ〟とアナウンスします。地震の訓練は、津波が来ることを想定しているので、ベルと同時にドアも揺らします。子どもたちはすぐに先生のところに集まる。ベルが鳴ったら先生の所へ集まるように、入園してすぐに指導しているからです。室内でも外でも同様です。続いて、事務室から〝先生たちは防災頭巾をかぶせてください。〟〝子どもの持ち物や上着を持たせてください〟とアナウンスし、次に避難を指示します。

天気を見ながら行いますが、園庭の遊具に集まる時には、中ズックのまま外に出ます。津波の訓練の時には、高台にある宮小に行きます。職員は、クラスの点呼をして人数を報告します。訓練の想定によって、

避難所に行くか、部屋に入って紙芝居や園長のお話しで津波の恐ろしさ、波はすごく早いということを教えます。

今の子たちは、プールで遊ぶので、砂浜で泳いだ時に感じる波の引く力がわからないのです。そのため、園長が〝津波が来たらどうするの？〟と聞き、〝高いところに逃げます〟と子どもたちに答えさせる訓練をしています。同様に、「てんでんこ」や「物を取りにいかない」ということも伝えています。物より命が何よりも大切ですから。

(4) 注意報・警報発令時の対応について

これまでの報告の中で、度々、子育て施設における警報発令時の保護者による引き取りについて触れてきた。非常時の引き取りは、全国的に見ても極めて一般的なことであり、各施設では、引き取り訓練も行っている。だが、その際、通常意識されるのは、迎えに来た者が保護者か保護者の委託を受けた者かどうかの確認についてであり、引き取りのタイミングや引き取り後の行き先については、ほとんど顧みられることはない。

他方、迎えに来る最中や、引き取った後に津波による犠牲者を出した宮古市では、震災後引き取りのタイミングを重要視するようになった。特に、浸水地域を通って来ることが懸念される場合は、警報が解除されるまで迎えに来ない。警報発令以前にすでに迎えに来ている場合は、一緒に安全な場所に避難するようになっている。

筆者は、取材を通して出逢ったすべての先生たちに、このことが強く意識されている印象を受けた。先生方は、犠牲を出した経験を教訓として共有し、それを自分にも起こりうることとして捉えているようだ。

ここには命を預かる先生たちの並々ならぬ覚悟がある。危険が迫る警報発令時、責任を持って子どもたちの命を守るので、信用して欲しいと言うのだから。

市から警報・注意報発令時対応に関する基本方針が示された

こうした現場の意識が高まりを見せる中、２０１５年になって、まだ実験段階ではあるものの、ようやく市の方から市立保育所に向けて、津波注意報、警報発令時の行動に関する基本方針が示された。（取材日：２０１５年10月）

宮古市は大変広い。想定される危険はそれぞれの施設で異なっているため、一般化された行動指針を作るのは難しい。それゆえ、これまでは個々の施設の判断に任され対応がまちまちの部分があった。それで、現場の先生たちからの要望があり、市としての基本方針が検討されたのである。

今回出されたのは、警報と注意報とに分けたフローチャートで、それぞれ、いつ、どこで発令されたか、そこが浸水域か否かで、取るべき行動が示されている。また、併せて職員の対応についても基本的姿勢が出された。

さらに、「※児童登所後について、原則として、警報が解除されるまで、児童の引き渡しは行わないこととします。但し、浸水区域を通らずに帰宅できる等、安全が確認できる場合には帰宅可とします。この場合でも、引き渡した児童の確認を確実に行います。また、児童を引き渡す際の相手は、当該児童の保護者のみに限ることとします」と明記されてもいる。

基本方針が示されたことによって、各施設では、これをもとに個別の対応が考えられる。また、市の方針を示すことで、保護者の理解も得やすいという利点があると、保育士の間でも一定の評価を得ている。

だが、問題も残されている。例えば、こうした図式からはみ出す事案や事情がある時に、誰の責任でどうするかは、未だ明確になってはいないようである。また、児童を引き渡す際の相手が保護者のみに限定されたので、非常時に児童引き渡しが完了するまでの時間が長期化することが懸念される。

問題は注意報の時

警報の場合は、登所前であれば、自宅待機。保育所にいる場合は、

解除されるまで引き渡さないと、その対応が明確であるが、問題は注意報の時である。

注意報の段階では、現時点では、基本的に通常通り開所することになっている。だが、注意報を危険視するかどうかは、個々人の認識によって異なる。注意報で仕事を休む人は少ないので、自然、保育所の性格上、受け入れ態勢がとられる。つまり、児童が来る前に開所できるよう、保育士自身は、多少の無理をしても出勤せざるを得ない。

だが、宮古市では、市町村合併で市域が拡大した分、自宅からかなりの距離を通勤しなければならなくなっている場合も多く、保育士の居住地域によっては、注意報が発表される中、浸水地域をいくつも通って出勤することもありうるのだ。こうした面に配慮した人員の配置が望ましいが、現状では難しい事情があるようだ。

また、児童が保育所にいる時に危険を感じたとしても、注意報では、勤務中の保護者に迎えの要請を出しづらいという問題もある。それぞれの施設が個々に情報を集めて決断するわけだが、判断に慎重にならざるを得ない。さらに、近年一般化しつつあるメールの導入が遅れているため、勤務中の保護者に電話連絡するのには、未だかなりの手間と時間を要するという。

警報・注意報時の対応に関する基本方針が示されたことは、一歩前進ではある。しかし、こうした問題の解決に向けての歩みが、今後さらに加速されることが期待される。

2　小学校における防災教育

(1)　平成17年度前後の改革

平成17年前後、宮古市における防災教育は大きく変化した。改革を中心となって進めたのが、平成9年から震災の前年度まで教育長を務めた**中屋定基先生**（昭和14年生）であった。宮古市の学校では、この以前から、3月3日前後に各学校で避難訓練が行われており、危機管理は各学校に任されている状態だったという（取材日：2016年5月13日）。

改革のきっかけとなったのは、ある新聞記事だった。平成17年11月15日の朝、ちょうど登校時に津波注意報が発令された。その時子どもたちが海岸付近を通って通学していた。その記事では、このことを問題視されたのだ。また、その頃、宮古市には海に面した学校が22校あったが、注意報時の対応が学校によりまちまちであったことも指摘されていた。

これを機に、教育委員会へは抗議の声が多く寄せられた。50㌢以下の津波の場合は、注意報なので、必ずしも避難が必要ではない。だが、記事が出て、児童生徒教職員の命を守るためにどうすべきか、市教委で協議することとなった。

資料によると、教育委員会の対応は迅速だったようだ。記事が出た平成17年11月には、『津波発生時の児童生徒の避難体制確立趣旨』が出されている。この文書の「現状」の項には、「学区の実態によるが、児童生徒が休日等に海及び河口付近にいることも予想されることから、児童生徒に津波（注意報・警報）発生時に主体的な避難行動がとれるように、市内全児童生徒に指導する必要がある。また、宮古市で指定している「避難場所」は無人箇所が多く、児童生徒だけが避難した場合、安全を確保することが難しいばかりでなく、二次被害が発生する恐れもある」とある。

そして、そのための「今後の対応」として、3つの方針を挙げている。

「1．自分の命は自分で守るという避難の原点に立った指導を行うことにより、児童生徒が主体的避難行動がとれるようにする」。そのための具体案として、「これまでの指導に加え、各校における『危機管理マニュアル』等を参考にし、指導の充実を図るとともに、平成18年3月の配布予定の『津波教育ＤＶＤ』等を活用しながら各校の実態に応じた指導を行う。」

「2．児童生徒の主体的な避難行動を支える『津波シェルター』を設置することにより、低学年の児童においても確実に自らの命を守ることができるようにする」。そのため、「設置にあたっては、保護者を中心にＰＴＡや地区子ども会、自治会などと協議し、決定する。決定後は、

学校で集約し、各家庭に連絡する。各家庭においては、津波（注意報・警報）発生時に児童生徒が素早く避難できるように『津波シェルター』の位置の確認をする。」

「3．『津波発生時の児童生徒の避難体制確立』の指導及び『津波シェルター』の設置を通して、保護者及び地域の災害からの避難意識の向上を図るとともに、学校と保護者及び地域の連携を深めた児童生徒の安全確保に努める。」そのための具体策として「『津波発生時の児童生徒の避難体制確立』のすべての活動を通して、保護者の児童生徒の安全確保意識を高めるよう配慮する」というものであった。

平成17年に宮古の防災教育が大きく変わる直接の引き金となったのは、先に紹介した新聞記事であったが、実は17年度前後に多くの人の防災意識を高めるような様々な動きが相次いで起こっていた。

それは、まず、30年以内に70％以上の確率で宮古市を大津波が襲うとする予測がたびたび報道されたこと。また、前年に起きたスマトラ沖の地震。防災意識の高い田老町との合併。さらに、岩手大学を中心としたＩＮＳ（岩手ネットワークシステム）による津波防災学習教材の開発に宮古市が協力することとなりワーキンググループが立ち上がったことなどである。

そうした機運の高まりの中で、教育委員会主導の避難体制確立に向けての動きが始まった。

活動の柱となるのが、①津波シェルターの設置と②「津波教育ＤＶＤ」であった。

①　津波シェルターについて

中屋先生は以下のように話している。

新聞報道をきっかけに、「津波シェルター」を考えました。このネーミングには大変腐心したんです。

津波の時には避難しなさいと言っても、低学年の子にはなかなか判断が難しい。高台に上ったはいいが、津波警報が解除されるまでにはかなり時間がかかる。それまでの時間の身辺の安全をどう保つかが課題でした。それで、人がいるところで相談できる場所を一次避難場所にして、一緒に逃げてもらうことにしたのです。とにかく人がいるところ、町中に、シェルター設置のお願いに行きました。津波シェルターは市内全域に一斉に設置をお願いしました。設置場所は、各学校に任されました。その看板は、当事、西中学校に勤務していた美術の佐瀬良聡先生がデザインして、２００枚作って配布しました。津波シェルターの看板は市の方で予算を出してくれました。

写真４　津波シェルターの看板

宮古市役所

②　津波ＤＶＤの作成と活用

平成16年頃、岩手県の方からＩＮＳに教材づくりを委託して、沿岸にある宮古市にその開発協力の依頼が来た。ＩＮＳは首藤伸夫先生（岩手県立大学）や堺茂樹先生（岩手大学）などによって作られた組織である。

検討委員会でワーキンググループを立ち上げ、どんなものを作るか話し合い、メンバーとともに教材づくりをしました。教育長は顧問となりました。実際に、資料を作って授業をして、ブラッシュアップしていきました。平成16年に開発をはじめて、平成17年から本格的に教材を使い始めました。高浜小学校の岩間三輝校長（当事）が一生懸命になってやってくれました。実際に授業をしたのは、佐藤紀夫先生です。そうやってＤＶＤを作りました。そもそも、現場の先生から防災教育のための教材がほしいという要望があったんです。できたＤＶＤは、県内各地に配布されました。

では、こうした教育委員会の動きを受けて、個々の学校の現場ではどのように取り組んでいったのだろうか。

(2) 鍬ヶ崎小学校の取り組み

平成17年当時、鍬ヶ崎小学校長であった**佐々木敏夫先生**は、次のように振り返る。

防災教育の取り組みは、私が鍬小の校長だったときに、平成15、6年頃、岩手大学の堺茂樹さんが作ったＤＶＤの津波教材で防災授業をやったのがはじまりです。中屋教育長（当時）が「鍬小は津波が来るところだから、あなたのところで先にやってくれ」と言うので実施しました。その時の防災授業は、坂下正義先生が最初にやりました。「防災かるた」も彼の学年で作った。それは、毎日新聞の「防災大賞」を受賞しました。

宮古市学校防災の特徴は、震災前から津波シェルターを設けていたことです。これは、土日放課後、地震が来たとき、注意報が出たとき、学校以外にいるときに逃げる場所です。これを作ったのも、当時の鍬小が最初でした。学校にいないときの子どもたちをどうしたらいいのかと、津波シェルターを考えた。それで、と私のところに話が来たのです。

津波シェルターには、高台にある家もあったし、学校によっては通学路に津波が来る場所もあるので、そこにも設置しました。鍬ヶ崎小学校はそうだった。通学路にあって、人がいるところにシェルターを設置して、そこが津波が来るところだったら、一緒に逃げてもらおうという思いがあった。だから、教育委員会の通知としては、津波シェルターはできるだけ人がいるところが望ましいということでした。

それで、津波シェルターになる家には、「子どもが津波シェルターに来たら、一緒に逃げてください」とお願いして、看板を出してもらったのです。

子ども110番と津波シェルターは兼ねていません。「子ども110番」は、ガソリンスタンドとか床屋さんなどです。シェルターの場合は、ＰＴＡに関係した家などに頼みました。

全部で5か所、私が頼んで歩きました。鍬小では、今回の震災で2か所くらい津波シェルターだった家が流されてしまいました。

鍬ヶ崎小学校では、年2回の避難訓練や、平成16年に始まる津波教材ＤＶＤによる授業や平成17年からの津波シェルターに加えて、「津波かるた」の作成と活用、「シミュレーション模型の見学」、「津波避難マップ」の作製など、震災以前から津波に備えた独自の教育がなされていた。こうした防災教育と、震災後の取り組みについて、震災時鍬ヶ崎小学校の校長であった**笹川正先生**は、次のように話している。

① 津波かるた

平成17年には、「津波かるた」を総合学習の時に実施しました。明治期に測候所（中里団地の梅翁寺付近にあった）で働いていた人が、これまでの津波の教訓を七五調の言葉で残していたのです。それを、子どもたちに広めるために考えたのが「津波かるた」でした。それを現代風になおし、絵を子どもたちが描きました。この取り組みを中屋定基前教育長が依頼して、鍬小と田老一小の6年生に行ってもらいました。

また、これを知った久慈の建設会社の社長が、これを評価して、印刷業者に頼んでマス刷りをして、久慈の学校も含めて広めたそうです。

鍬ヶ崎小学校では5、6年生が昼休みに1、2年生とかるたで遊ぶことで、知らないうちに低学年にも防災知識が染み渡らせるような取り組みもなされた。

写真５　津波かるた

② 津波シミュレーション模型の見学

宮古工業高校では、震災以前から津波が来た時に、どれくらいの地域が侵食されるかというシミュレーション模型を作って実演していた。平成16、7年頃、産業まつりで初めて模型が披露され、その後、各学校への出前デモンストレーションが行われた。これを鍬ヶ崎小学校は一番にとりいれて、毎年、3、4年生がそれを使って勉強する時間を設

けてきた。笹川先生は、次のように話している。

もう、工業高校さまさまです。これくらいの高さの津波であれば、ここまで水が来るという、工業高校の模型の通りに津波が来ました。「あー、俺ん家も大変だ」なんて言って笑いながら見ていた子もいたわけですが、実際にそうなってしまった。それほど、正確な模型だったのです。そういうのを見ながら子どもたちは、津波の大変さを目で体験することができました。

シミュレーション模型の実演は、かなり効果がありました。テレビやDVDで観る映像に比べると、模型の方がかなりリアルに感じられました。実際、「ここ俺ん家」とわかる。そしてずっと見ていると、ぐちゃーと波が来て「やばい」というのが感じられる。それで、避難の必要を、子どもたちは考えられるようになるのです。工業高校さんには感謝しています。

③ 地域の人の力をかりた6年生（平成22年度）の「避難マップ」の制作

昔から鍬ヶ崎だけ堤防がないんです。（＊笹川先生が）平成22年に赴任したとき、いろんな情報があって、堤防の是非をめぐって町が分かれていたので、これは意識して避難させていかなければならない、と考えていました。そんな時に、海上保安庁か国土交通省の巡視船に乗って湾内を回りながら、堤防が作られている様子を海から見る機会を得ました。「ここは5㍍」、「ここは8㍍の高さにしている」という説明を受けましたが、子どもたちも鍬ヶ崎には何もないのを見て、これは逃げるしかないな、と感じたようです。

それを出発点に、「では、どうやって逃げる？」ということで、地域の人たちの力を借りて、鍬ヶ崎8つの町内一つ一つに避難ルートを作ることになりました。そうして、平成22年度の6年生が聞き取りをしながら、町内の方々と作り上げたのが『避難マップ』です。

それを印刷して町内の全家庭に配ろうと思い、教頭先生が原版を持って印刷業者に行こうと車に乗ったら、グラグラと地震が来たのです。3月11日のことでした。結局、配布できずに幻の避難マップになってしまいました。

④ 街の人へのインタビュー　6年生（平成23年度）の取り組み

平成22年度の5年生は、キャリア教育の一環で、海の恵みを生業としている魚屋さんや漁業者さん、お店の人など、鍬ヶ崎の街の人へのインタビューを行いました。「なんでこの仕事についたんですか？」とか、「やりがいは何ですか？」などの一般的な質問をしていたのですけど、3月11日の津波で、その店々が全部被災してしまった。

だが、しばらくすると、寿司屋さんを皮切りに1人また1人と連鎖的に立ち上げる雰囲気が感じらるようになったんです。それで、震災後の23年度、5年生は6年生になっていましたが、前年に取り残した店に出かけ、もう一度インタビューさせました。「いま、どんな気持ちでいるか」、「もう1度やるつもりでいるか」を聞きながら、自分たちは、今、何をすればよいか考えて来いと言って送り出しました。そしたら、お店の方々から、「もう1回やるよ」という返事をいただき、元気になったようでした。

ボート屋さんは、「やめようと思ったが、先代のお父さんが作ったボート屋という看板が残っていた。それを見たら、またやれということかな、ということで再開することにした」と話されました。このような素敵な話を彼らは聞いてきたのです。

報告を聞きながら、このままで終わらせるのはもったいない。シナリオを書かせて劇を作って上演を目指そうと思い、プロの脚本家や音楽家やカメラマンに入ってもらって、いろんな段階を踏みながら「輝こう鍬ヶ崎」を作り上げ、11月の文化祭の時に発表することにしました。当然、在りし日の鍬ヶ崎の様子も映像で写しました。観ている人たちは泣いていました。保護者や地元の人たちで体育館が満杯になった。おそらく4、500人は来ていたのではないでしょうか。ものすごい数だったけれども、これが一つの気持ちを切り替える場面になるなら、それも子どもたちの役割かなと思ってやらせました。それが、そ

の次の年の6年生の取り組みでした。

⑤ 立ち上がる大人、23人の姿を子どもたちに見せる　5年生（平成23年度）の取り組み

震災前の22年度の4年生たちから、ホタテの養殖体験を始めました。漁業者養成ということで振興局の方から、やりませんかという話があったので、面白いと思い、話に乗りました。田中さんという漁業者さんも、「では、面倒見るか」と言ってくれました。

本当は、ホタテの養殖は種からとらなければならないのですが、それは割愛して、①1・5センチくらいになった稚貝を分別する作業、②4、5センチになった貝を釣り上げる「耳釣り」、③出荷する前に置いていたものをお借りして、出荷するためにゴミをそぎ落とす成貝の掃除作業など、4回ほど作業体験をさせてもらいました。1、2月には食改（＊食生活改善推進員）の女性たちに教えてもらって料理を作り、お世話になった方々をお招きして感謝の会を開きました。これまでが前年度の4年生の取り組みでした。

お世話くださった漁業者の田中さんは、津波で養殖も施設もご自宅もすべてを流されて一切をなくして、しばらく熊野神社に避難されていました。

3月13日、震災からわずか2日後の朝早くの事です。田中さんが、学校にサンダル履きに、着の身着のままで来られて、「また、やらせっからよ。ちょっと待ってろ」と話して、何もなかったかのように帰って行かれました。

最初、何をおっしゃっているのか、わかりませんでした。「またやらせる」って養殖のことだよな、そんなことを考えている状況じゃないだろう、と思ったのですが、それだけ子どもらの事を考えてくれる人だということがわかり、改めて感動したというか、言葉にならないものを感じました。

このように、震災をものともせずにまた立ち上がろうとしている人たちもいるので、そういう事も記録に残そうと思いました。そこで養殖体験をした4年生が5年生になった時、町内会長さんや民生委員さん、そしてもちろん漁業者さんなど、地域の23人の方々に集まっていただいて、「あの時どう避難した、これからどうする」ということを質問し、自分たちが生きていくための知恵とするための聞き取りを、2回ほどやりました。

そして、それを子どもたち自身で編集して、そこから得たものを5つの提言（「グラッと来たら逃げるべし」など）にまとめ、3月11日の震災の「いのちの集会」の時に、発表させました。

私は、学校というのは知識を教える場所だが、知識だけで生きていけるわけではないから、知恵をしっかり子どもたちに身につけさせないと、自分の命は守れないと思っています。そのために、やれるだけのことはやったという事です。

（＊立ち上がる大人の姿をあえて見せることによって、子どもの気持ちも）変わったんじゃないかな。そこはわからないですけど、でも、配慮はしました。4、5年生が聞き取に取り組むときには、町内会の方々に、「子どもたちにこういう事を調査させるのはどうなんだろう」、と相談したら、「今だからこそできるし、やらなきゃだめなんじゃないか」と強い後押しをしていただいたんです。「やめろ」という人はなかった。そこで、「よし、じゃあやるか」という気持ちになった。

その後の事ですが、実は、震災の年の4年生も養殖体験をやらせてもらったんです。8月に1回、しかも海から1メートルか2メートルのところで、炎天下だったのでテントを張りながら、1・5センチくらいの稚貝の選別を子どもたちにさせてもらいました。

その時には、事前にご家庭全部に確認の文書を出したんですが、誰も「やめろ」という返事はなかった。これを「やってもいい」ということと、今、私たちがやっていることは、地域も含めて親御さんたちも理解してくださっているのだと解しました。心強かったです。

⑥ 冊子『歩みだそう未来への一歩～命を守った知恵をもとに～』

この冊子は、あの当時の子どもたちには全員配りました。担任と一

緒に地域の方23人に聞き取ったことをまとめたもの。子どもたちがどういう人生を歩むか決意を書いたもの。防災マップは模造紙を縮小して、町内に住んでいる人ならわかるような図式にしたもの。そして、6年生たちが作った劇「輝こう鍬ヶ崎」のシナリオも、エピソードを加えて編纂しました。

そして、それらを防災甲子園に応募して、発表して、優秀賞を取りました。次の年はグランプリを取ったみたいです。すごいですよね。

表紙の写真は、ＮＰＯの人たちの中にカメラが趣味だという若者がいて、重なりがないように顔と名前を一致させながら当時の5年生全員分の顔写真を撮ってくれました。

本当に皆さんにお力添えいただきながら作り上げたので、これは宝物。こんなのを短期間に作り上げたのは、すごかったんだなと、今、改めて思います。

(3) 登下校時の避難訓練（高浜小学校）

次に校庭まで津波が入りながらも、1人もケガをしなかった高浜小学校の避難訓練についてみてみよう。

現校長・中村登志江先生によると、高浜小学校では、年間に避難訓練を5、6回行っている。校舎からの出火を想定した火災、地震、津波に対する訓練では、校庭に集合して、隣接する金浜老人福祉センターに避難する事になっている。以前は、学校が避難所に指定されていたが、津波が学校まで来たので、震災以降はセンターが避難所になった。こうした訓練は3月3日の津波の日を中心に行っており、津波に関する話や訓練をしている。

また、高浜小学校では、通常の各種避難訓練に加えて、他に先駆けて登下校時の避難訓練も行っている。

平成19年から震災の前年度まで校長であった**宮城貞子先生**（昭和24年生）によると、高浜小学校の登下校時の避難訓練は、その前任の校長が津波シェルターの設置を受けて始めたという（取材日：２０１６年5月13日）。津波シェルター設置以前は、校内での訓練だけだった。

前述の通り、学区の中でどこに津波シェルターを設置するかの判断は、各学校にゆだねられている。海に面した高浜地区と金浜地区を校区とする高浜小学校では、津波シェルターは高台で、近くに常に連絡がとれる家がある場所に設置した。設置場所は、地域の地形を熟知し自治会の役員などをしている方と相談しながら選定されたという。

現在、高浜小学校では、①登校前、②登校途中、③下校時の３つの訓練を、３年ごとにローテーションを組んで行っている。小学校の６年間にそれぞれ２回ずつ体験すれば、児童にも有事にどのように行動すれば良いかがイメージできるのではないかとの考えだ。２０１５年は登校途中、２０１４年は下校時の訓練を実施した。

① 登校前の訓練は、まだ自宅にいる時間に、警報発令のため自宅待機、および少し時間をおいた後、解除されたので登校する旨を、それぞれ学校から登校班の班長宅に電話連絡し、班長が連絡網をつかって各家庭に伝達する訓練である。その際、教員も要所に配置される。

② 登校途中の訓練は、生徒は登校班で学校に来るので、通学途中で注意報や警報が出た時に、どういう行動をとるかの訓練である。歩いている時に警報や注意報が出たら、登校班のリーダーが判断して、一番近い津波シェルターまで班の子を連れて逃げる。

③ 下校時の訓練は、下校時に警報などが出た時に、どの津波シェルターを通ってどう逃げるか、どういう行動をとるかの訓練である。

宮城先生は、登下校時の避難訓練をするようになった背景を次のように話している。

当時、地震があれば70％以上の確率で津波があると予測されていたので、いつかその日が来るだろうと危機感を持っていました。海辺の町であるし、チリ地震で学校が被害に遭い、その後現在地に移転した経緯もあり、危機に対する備えが必要だったのです。災害はいつ来るかわからないですから。高浜小学校の子どもたちは、海辺を通って通学して来ます。子どもの集団登下校時にいろんな場面を想定して備えておく必要があるのです。多様な訓練が必要ですが、まずは登下校訓

練からはじめました。

高浜小学校では、登校班による集団登下校を実施している。現校長の中村登志江先生によると、登校時は6年生がリーダーだが、帰りは登校班の中で一番上の学年の子がリーダーとなって先頭で班を引率する。登校班は地区でここまでが何班と決まっている。高浜小学校の児童数は現在55名なので、6年生は誰でもリーダーになる状況にあるという。

学校では、低学年なら「生活科」、あるいは「学区探検」などの授業を通じて、金浜、高浜地区の津波シェルターの場所を確かめている。6年生になると、先生よりも地元のことをよく知っている。また、子どもたちは毎日一緒に来ているので、メンバーそれぞれの歩く速度などもわかっており、どのシェルターに行けば良いかも判断がつくようになる。宮城先生も「代々の班長をきちんと教育しておけば、あとはついてくる。班長会議などの際に指導をして班長の意識を高めたりした」と話す。

登校班は、平成21年の時点で、高浜に3班、金浜に3班あった。訓練の記録資料によると、津波シェルターは、高浜1区には2か所、高浜2区には1か所、高浜3区には2か所、金浜1区には2か所、金浜2、3区には3か所ある。教職員は、訓練に備えて、普段から登下校の様子を観察し、いつ頃どの班がどのあたりを通るか、情報を集めている。

登下校時の訓練では、「津波警報発令」を合図に、リーダーの判断でその時一番近い津波シェルターへ避難行動をとれるかをみるのである。

宮城先生によると、訓練の初回時は、消防団の防災無線を使って「津波警報発令」と放送したという。しかし、消防団の無線は、高浜にあり、金浜までは聞こえないので、途中途中に配置された職員が拡声器で伝達した。

避難訓練をすることは、事前に地域の人にも周知しているが、あまり、音が大きすぎると、無関係の地域にまで聞こえて迷惑をかけてしまう恐れもある。本来、防災無線はいざという時のためのものなので、混乱を来たさないようにしなければならない。地域的に消防団の人も学校に協力的な地域だが、住民への配慮が必要だ。

また、放送時に子どもたちが津波シェルターを通り過ぎていては意味がない。そのため、出発を管理する先生を学校に配置して、ちょうどシェルター付近で放送が聞こえるように、班ごとに出発時間をずらして送りだした。どのような方法でするのがよいか、どうすればスムーズにできるか、試行錯誤したそうである。

ただ、このような避難訓練をするには、教員の数が足りないことが問題だった。スタッフが少ないと十分に子どもたちを観察することができない。人員の確保が課題だった。そのため、地域の人たちにも助けてもらうことにした。普段、登校時の安全を見守ってくれているスクールガードの方々には、シェルターで待機してもらい、子どもたちが着いた時点で、報告してもらう。また、シェルターの担当を依頼している家の人にも訓練に参加してもらい、どこのシェルターに、今、何人子どもが来ていると、学校への連絡をお願いしている。シェルター担当の家は、訓練の時以外にも、何かあるときにはきちんと対応してくれるそうである。

一方、学校から送り出す側の先生方は日ごろの観察から、訓練開始の時刻から判断して、どの班がどこのシェルターに行くだろうという予測を立てている。その様な中、中村先生によると、２０１４年の訓練では、高浜方面のある班が、教員の予測よりも先に進んでいたので、6年生のリーダーが「ここならこちらの方が近い」と、自分でしっかりと状況を判断して、先生方の予測とは別のシェルターに行ったそうだ。

このように、学校では、子どもたちが6年間かけて地域の津波シェルターの場所を覚えて、自分で判断して避難できるようになるのが一番良いと考えている。常に集団で歩いているわけではなく、1人で歩いている時もある。こうした訓練を通して、自分でしっかり判断して行動できる、1人でいても命を守れるようになることが目的なのである。

⑷　宮古小学校の取り組み

２０１６年３月11日に宮古小学校で行われた津波避難訓練には、早朝６時にもかかわらず、２００名もの参加が見られた。前年の参加者が10名足らずだったというから、驚くべき数字だと言える。実は、これには子どもたちが主体的にかかわっていた。

宮古小学校では、平成24年度岩手県教育委員会の「復興教育推進校モデル校」に指定されたことを機に、「ふるさとの復興を担う『人づくり』の展開～『自分から』かかわり、学びを深める児童の育成～」と題して、「自分から」かかわることを通して、学びを深める指導の在り方の研究を積み重ねてきた。それは、岩手の復興プログラムに示されている三つの教育的価値である「いきる」「かかわる」「そなえる」を具現化するものでもある。

「ふるさとを愛する子　心やさしくたくましく生きる子　主体的に学ぶ子　自分の命は自分で守る子」を目標とする人材の育成を目指して、「伝え合う」、「かかわり合う」、「助け合う」、「つなぎ合う」をキーワードに、各学年で国語・社会・体育・特別活動などの教科を通しての取り組みがなされている。

今回の津波防災訓練にかかわったのは、２０１５年度の４年生たち50名と、担任の**石澤綾子先生**、**坂下大輔先生**（昭和59年生）である。坂下先生に話を聞いた（取材日：２０１６年５月11日）。

復興教育に結び付けやすい単元は、地域に出ていくことが多い「総合学習」や「社会」という科目である。こうした科目を通して、子どもたちは少しずつ学習を深めていく。「総合学習」は、３年生から始まる。まず、２０１４年度の３年生は、水門など宮古市の防災施設を見学に行った。

４年生の「総合学習」では、「いろんな人とふれあおう」をテーマに、１学期には老人クラブに行って高齢者の方々と共に活動し、２学期には、障害のある方々と交流した。こうしてお年寄りや体の不自由な方など、さまざまな環境にある人が共に生きるということを学んだ。

平行して、６月の「社会」で「安全なくらしとまちづくり～火事を防ぎ、地震にそなえる」をテーマに、消防士や消防団員等など防災の役割を担う人たちについて調べ、社会に参画していくことの大切さを学習した。

10月の「特別活動」では、被災して避難所生活をしていた人に、避難所で困ったことを聞き取ったり、震災時に避難所で子守り役を買って出ていた小学生をとりあげたニュース映像などを見たりした。

そして、これまでの学習を踏まえて、３学期の「総合学習」と「社会」では、３月11日に行われる津波防災訓練での「避難所シミュレーション」に向けて、自分たちにできることは何かを考えた。

例年、津波避難訓練への参加者はあまり多くない。参加者を増やし、地域の防災意識を高めてもらうために、家族や近隣の人々などへ向けたポスターやチラシを作成し、参加への呼びかけも行った。

また、自宅から避難場所までの所要時間を計算したり、「避難所開設シミュレーション」での作業リストを考えたりして、本番に臨んだ。当日は非常米で作ったおにぎりの炊き出しを行って参加者にふるまうことにした。

かくして、50名の４年生と、その家族や近隣の人、１学期に交流した老人クラブの方々など、２００名を超える人々が子どもたちの声掛けに応えて集まった。

坂下先生は、「こうした取り組みは、次の４年生にも引き継がれていくことになっていますが、子どもたちを中心とした学校発信の取り組みから、地域の活動へとつながっていくことを目指しています」という。

実は、今回の宮古小学校の「避難所シミュレーション」も先に紹介した震災直後の鍬ヶ崎小学校における取り組みも、いずれも笹川校長のもとに行われた。宮古では、「ふるさとの復興を担う人づくり」を超える、復興の先の未来に向けた取り組みが、すでに進められているのである。

E　地域とのつながりを防災に役立てる

1　地元の人の声掛けが命を救った

小学校や、市立保育所などの先生方には転勤があり、地域の地理や事情に不案内のことも少なくない。今回の震災は、たまたま年度末に起こったので、地域の事を知り、地域の人たちとの関係を築く時間があったが、それが年度初めだったら、適切な行動に結びついていない可能性もなくはなかった。

実際、地元の人の声かけや情報が、避難の際の決め手となっている。津軽石保育所では、近くの人が、「俺は前の津波を経験したが、あれよりすごかった。先生、すぐ逃げろ」と言ってくれたり、「学校はもう上に避難しているから上に行け！」と声をかけてくれ、そのことが安全な場所へと導いていた。子どもの命を守るために、地域との連携は必要不可欠だ。

以下には、地域とのつながりを強化する具体的な取り組みをみてみよう。

2　地域と学校とのつながり

崎山では

崎山保育所は小中学校のそばにある。涌田朋子先生によると、2年ほど前から、中学校と協力して避難訓練を行っている。中学校の方からの申し出で合同訓練が始まったという。

避難が必要な時、誘導車を押したり、物を詰めたり、けがをした子どもを複数で抱えて逃げるなど、保育士たちだけの力では難しい部分を、中学生に手助けしてもらえたら助かるという。

一方、保育所の方でも、中学校の保育体験の受け入れをしたり、運動会の時に生徒にボランティアで手伝いに来てもらうなどしている。こうした日常の活動における交流が、災害時の助け合いにつながっていく。崎山保育所では、中学校との新たに始まった協力関係をずっと続けていきたいと考えている。

花輪では

また、伊藤るみ子先生によると、花輪でも、保育所と地域の学校とのつながりが深まっている。花輪では、川の氾濫や土砂崩れが危険視されているが、小学校の校長先生から災害時は「小学校においで」と声をかけてもらった。そして、小学校が保護者向けに流すメールを、保育所にも配信してくれることになったので、小学校と同じような流れで避難できるようになったそうである。

3　地域の方々との日ごろの交流があってこそ

①　愛宕保育所では

一方、**小向聖子先生**（昭和32年生）によると、現在、愛宕保育所は、隣にあった小学校が閉校したので、体育館は避難所としてあるものの、学校の力を借りて一緒に逃げることはできなくなったという（取材日：2015年9月17日）。

自分たちでとにかく逃げるということです。地域に仮設住宅はあるが、昼間は若い世代はいらっしゃらない。残っているのは、お年寄りの方が多い。

そのため、地域の消防団の方々や町内会長さんなど、そういうつながりをもう一回見直したいと思っています。つながりは前からあったのですが、なくさないように、たびたび案内を出したりしています。

震災の時に、愛宕の体育館の後ろの坂道を上がったという話は前任者から聞いていましたが、揺れのある時に小さい子を背負ったり手を引いていたり、子どもの足で上るには、整備されていない細い急坂なので、あぶない。それで、避難場所になっている反対側のお寺の方の道路も逃げてみようと思っています。散歩に行った時に声をかけて、お寺とのつながりを大切にしたいと考えています。

②　ひかり幼稚園では

ひかり幼稚園は、2015年11月から認定こども園になった。認定こども園になれば、より広範な地域のセンターとしての役割を担うことになると考えているためだと思われるが、そこでは耐震対策はもちろん、非常食料の備蓄を含めて、より万全な対策を講じる計画がある

ようだ。

だが、取材した時点（２０１５年９月）では、**森分園長**は、「現時点のひかり幼稚園では、非常時の備蓄を意図的に持たないことにしている」と話していた。それは、（＊当事の）自治会をはじめ、地域とのさまざまな協力関係ができているからだという。

自治会の役員の多くは、卒園児の家族です。何十年か前の園長は、そうした繋がりを重要視せずに付き合いをしていなかったのですが、その後は地元との繋がりを大切にしてきました。

園でイベントがあれば、自治会に声を掛け園に来てもらうし、こちらも地域のイベントがあれば参加します。お酒の付き合いもなるべく断らない。園のクリスマス会では、例年、自治会の方にサンタさん役をお願いしています。

３・11の時、園児の保護者の方々もたくさんいるので、地区の集会所に行ってみたら、農家の人が発電機を持ち込んで煌煌と灯りが照らされ、ストーブが焚かれて、暖かすぎるくらいでした。こんなことをしていては、超長期的に持たせることはできないと提言しました。また、物資を回してもらうために指定避難所に行くように提案しました。

こうした、意見がしっかり言えて、それが受け入れられるような関係性を日ごろから大切にしているのである。

「幼稚園ではセキュリティは入れていないが、近所の人が守ってくれる。たとえ、うっかり夜電気をつけっぱなしで帰ったとしても、すぐに近所の人が知らせてくれる」という。

非常時に地域の人に助けてもらおうとしても、普段やってないことはできない。普段お付き合いがないのに、困ったときだけ助けてもらおうなどと、そんなに世の中は甘くない。普段から地域と密に繋がりがあるから非常時に助け合えるのだと考えています。

西町３丁目に引っ越しをするが、引き続き山口地区の自治会との付き合いは継続したいという。そして、さらにより広範に地域の人々との付き合いを広げて、こども園を地域づくりの一環でとらえてもらいたいと思っているそうだ。

４　「おらほの学童の家」と思ってもらえるように

有事に、助けてもらうために、日頃の関係づくりが大切なのは、学校や幼稚園保育所ばかりではない。元鍬ヶ崎小学校学童の家の創設にかかわった**田畑先生**は、次のように話している。

学童の家を開く時、心を砕いたのは、鍬ヶ崎の町の人に「おらほの学童の家」と思ってもらえるようにすることでした。地域との交流を大切にしていました。「なあど」でミズキ団子を作るイベントの時には、学童の家の子を招いてもらいました。土曜日には鍬ヶ崎の町を子どもたちと散歩しました。籠っていては何かあったときに対処できないので、地域の人たちに子どもたちのことを知ってもらうために、顔見世興行のような宣伝のつもりだったのです。

このように、まず自分たちの存在を知ってもらい、散歩などの際に声をかけたりして地域の方々と交流をもつ。あるいは、常日頃から子どもたちの活動に地元の方々の協力を得る。こうしたことが、もしもの時に、子どもたちの命を救うかもしれない。こうした意識を持つことは、学校や保育所等の施設ばかりでなく、親や祖父母など子どもにかかわるすべての大人に必要なことではないだろうか。

高浜小学校の中村校長が「金浜・高浜地区では、包み込むように子どもたちを守ってもらっている」と話されているが、このような関係は、金浜・高浜地区のみならず、鍬ヶ崎にも津軽石にも見られた。

震災の話を聞くために筆者が市中を回っていて何よりも印象的だったのは、地域の人々の間のこうした協力関係である。あれだけの経験をしてなお、「命だけ助かれば、物は何とかなる」と思えるのは、こうした密な人間関係があるからである。こうした密な人間関係は、宮古市の大切にしたい防災における強みである。

5　消防団の力を借りる

地域とのつながりの中で、消防団の存在は非常に大きい。震災時、各地で地域の消防団の方々によって多くの命が救われたが、宮古市の各学校でも同様であった。高浜小学校の元校長・**大洞晴洋先生**は、地域との連携について以下のように語っている。

日頃から地域のつながりをもっとも大事にしました。消防団の集まり、行事、敬老会、スポーツ大会などに招待を受けたりしますが、それはほとんど休みの日なので、休みたいという気持ちがありながらも、やっぱり出た方がいい。2年しか高浜にはいませんでしたが、1年目の3月に震災が来ました。

同じ日に高浜地区と金浜地区のお祭りがあったりするので、午前中金浜神社に行って、午後、高浜神社に行くとか工夫しながら、赴任した年にはほとんどの行事に出ることにしていました。消防の集まりなどにも行って一緒に呑むなどして、つながりがいろいろとできました。津波の時に来てくれたのも知っている人だったから、消防の人も避難指示を出しやすかったようです。こういう時のためにちゃんとしておいてよかったと思いました。

現校長の**中村登志江先生**は、避難に迷っている時に消防団が誘導に来てくれた時の様子をこのように話していた。

少し前、そこまで大きい地震ではなかったのですが、警報が出てサイレンが鳴っていて、どうしようと思っているところに、消防車が校庭に来ました。警報が出ているのですぐに避難するように指示がありました。震災の時に、高浜小学校でも消防団の方が助けてくれましたし、鍬ヶ崎小学校も消防団の人のおかげで助かりました。消防団の方はそういう時は、「大丈夫か」と来てくださる。

赴任した時には挨拶に行くし、学校行事の時は、来賓として来ていただく。消防団の方との関係を大切にしています。

いざという時、避難誘導のために、学校などの施設に来てくれる消防団の方々は、転勤ではじめてその地域に赴任する先生たちにとっても、最も頼りにできる存在と言えるだろう。

おわりに

津波で大きな犠牲を払った宮古市では、「警報が解除されるまで迎えに来ない、すでに警報以前に迎えに来ている場合は、安全が確保されるまで一緒に避難する」ということが、震災後、子育てを支える施設のスタンダードとなった。

何度も言うが、これは「預かっている子どもの命は私たちが絶対守る」という保育者たちの強い覚悟と信念があってこそ言えることである。その言葉を保護者が心から信じることができて初めて実践される。保育者・保護者の双方がこのことを忘れてはならない。

また、個々の施設や個人の体験談から明らかになったのは、地域の人との連携が命を守る上でどれほど大切なものなのかということである。多くの物を失ってもなお、「命さえあれば、物はなんとかなる。実際、分け合ってなんとかなった」と語れるのは、そうした地域の人間関係に対する強い信頼の表れであり、それが宮古の防災における強みである。

震災から5年。瓦礫はすっかり片付き、具体的な津波からの避難の在り方や避難場所の選定など、津波に対する仕組みがかなり固まってきている。今後は、震災の記憶の風化をどう防ぐかが問題である。筆者が行ったインタビューの中でも、いくつかそうした声が上がっている。

震災の記憶もだんだんと風化していくものです。昭和の津波で磯鶏地区は大きな犠牲を出して、石碑も立っていますが、80年も経つとすぐそばにあるのに誰も見ていない。記憶が風化するのが怖い。ずっと呼びかけていかねば、行政の力でやらなくては、代が代わるとわからなくなって来ます。しかも、磯鶏地区は転勤族が多く、幼、小、中、高といずれの学校も転勤者の子弟が多いんです。教育委員会などが主導して津波の恐ろしさや逃げる場所、避難路などを、毎年教えるよう

にした方がいい。（そけい幼稚園・**晴山洌理事長**）

いざという時いつでも動けるようにしておくことです。まだ4年半（＊取材時）だからいいですが、20年30年たってどれだけ伝わっているか。今は避難をどうするかとか、どう動くかは固まってきましたが、それをどう継承していくかが問題です。（**大洞晴洋先生**）

宮古で育つ子どもたちに、保育施設で、学校で、家庭で、常日頃から「宮古は津波が来るところなのだ」ということを意識させ、もしもの時に適切な行動ができるように、具体的に教えること。転勤などで宮古に転居して来た人たち、特に子どもを持つ世帯に防災情報を伝えたり、防災意識を高めるような仕組みを作り、それを継続・継承すること。これが、子どもたちを守る取り組みにおける今後の大きな課題である。

【注】

（1）ただし、文体等には多少手を加えてある。

（2）今回、震災当時の千鶏小学校の関係者から話を聞くことはできなかった。こちらの様子については、『二〇一一・三・一一　東日本大震災の記録　未来を信じて　いま歩き始める』（2012）に記事があるので、参照されたい。

震災以前に千鶏小学校の校長をしていた大洞晴洋先生によると、「千鶏小学校に2年いたので、ここはまずいぞと思っていました。千鶏にいる時に津波はすごく心配した。千鶏小学校では災害時に山に登る訓練をしていました。マニュアルで決まっているコースでした。学校の校舎の裏の住宅を通って道路に行くコースです。あそこはすぐ外海だが、訓練は高浜ほどではなかった。学校だけの訓練でした。高浜の方は、そういう面では訓練が進んでいました」と話していた。

（3）宮古市保健福祉部福祉課子育て支援室提供「東日本大震災における保育所等の対応状況」

（4）3歳未満。

（5）前掲資料

（6）小さな園児を一度に複数運べる大きめのワゴンのようなもの。

（7）注6と同じ

（8）前掲資料

【参考（引用）文献】

宮古市保健福祉部（平成24年6月29日15時現在）「社会福祉施設・社会教育施設・文化施設・体育施設　被害報告」

宮古市保健福祉部福祉課子育て支援室提供「東日本大震災における保育所等の対応状況」

岩手県小学校長会発行　『二〇一一・三・一一　東日本大震災の記録　未来を信じて　いま歩き始める』2012年

岩手県私立保育園連盟　編集・発行　『東日本大震災　岩手県　私立保育園の記録　2011・3・11～2014・3・31』2014年

『「津波発生時の児童生徒の避難体制確立」趣旨』2005年11月、宮古市教育委員会

【資料】

協力者への聞き取りデータ及び、参考（引用）文献で上げた資料。